

史 學 (近世史)

諸 言

文學士 福 富 孝 季 講 述

吾人苟くも各國興廢起滅の原由を知り盛衰強弱の岐るゝ處を察せんと欲せば
須らく歴史を學ばざる可からず夫れ歴史の物たる國家治亂の因果を探究する
に足る可き材料を蒐集し之を一片の竹帛に録載する者にして各國に起生せる
諸般の事實を記し之を吾人に傳ふるの具たり唯た其れ事實故に歴史の性質を
資りて之を科學なるものに比するときは其の大に相異なる處あると知らざる
可からず彼の科學や吾人に教ゆるに一定抽象的の元則を以てし吾人をして其
元則を超越ると一步たもする能はざらしむ歴史に至りては否らす其主とする
處單ふ事實の記述に存せるか故に其事實よりして捻出せる吾人の想像は卓々
として餘地あり彼の科學の範圍固定して吾人に踴躍俯仰せしむるの比に非ず
有名なるハツクル氏は歴史を以て之を一課の科學となさんと欲せり曰く世
界の變遷推移するは統計上吾人の知り得る處なり天象地候風土氣候素と人間

を陶冶するの力あるが故に英雄豪傑例へば那翁の如きなしと雖ども能く今日の歐洲を鑄造し得べしとアーソニーフラウド氏のハツクル氏の説に反對し歴史を以て社會の顯象を有の儘に記述する者とし其原因結果の相關する處を決するには唯た吾人の想像に訴ふるの外なしと云へり

二氏の説く處斯くの如く相反せり然るに余は其何れにも未だ服従する能はざるあり何と云へばハツクル氏の那翁なしと雖今日の歐洲を鑄造し得べしとするは事を無限の歲月に期したる者にして結局氏の説の如くなるやも知る可からずと雖歴史を以て既往の事實により以て今日の現状を推知するの具なりとする以上は那翁の歐洲に起りしは則今日の歐洲を鑄造するの近因たりし者とせざるを得ず又アーソニーフラウド氏は歴史を以て有の儘の顯象を記述する者なりと云ふも世界の現状を有の儘に記述せんとは吾人の到底爲し能はざる處なる可し加ふるに歴史を以て有の儘の現象を記述する者ありと謂ひながら其事實を判斷するハ吾人の想像に訴ふるの外なしと云ふ是れ其言の茫漠たる吾人を以て其把握する所を知る能はざらしむ

夫れ然り歴史上の議論は以上の如く想像の餘地ある者にしてハツクルアーソニーフラウド二大家の所説已に反對せるのみならず余の薄識なる猶は二大家の説に服従せず他に自身の持論を主張するを得べし是れ余の史學を以て想像の餘地ありとする所以にして之を攻窮するの頗る愉快なるを感ずる所以なり

第一回

近世史の起原

抑近世史といふ古代史に對するの謂にして普通に紀元四百七十六年羅馬西帝國の没落を以て其分界となせり然れども多くの學者は其著書其他歴史攻究の便利の爲め更に近世史を分割し右羅馬西帝國の没落より土都コンスタンチノールの荒廢即ち羅馬東帝國の滅亡迄を中古史と稱し爾后今日にいたる即ち今世史本部(Modern History Proper)とも稱す可き者を近世史と稱せり故に余も亦た講述の利便を圖り中古近世の二部に區別し茲に中古史の講義を初めんとす

紀元百七十六年羅馬西帝國滅亡に至る迄の歴史は古代史の擔任講師か之を講述したる筈なるを以て今又た余の反覆を要せざるも講義の順序として少く古代

史の部内に溯るは又止むを得ざるなり要する羅馬西帝國滅亡の原由たる是れ北方野蠻人民の襲來せるあるか爲めなりとす可きも此の言たる單に表面の上事蹟を述べたるに過ぎざるものにして深く羅馬滅亡の原因を探討するときは素より遠く由來する所の者あり古へ羅馬共和政治の末年に於てマラヤス及ヒシラーの紛騷あるや北方セルマン人種は屢々隙に乗して羅馬國境を襲ひしことあり其後ローガスタス・マシーザの時代に於ても常々セルマン人とゴールの地方に戦ひ辛ふして其侵入を防げり史家ハラム氏曰く「武威と政略とを以て支持されたる羅馬國も遂に野蠻人の倒す所となれり」と夫れ然り實に羅馬共和政の時代にありては其武威猶ほ赫々たりしなり故に慄慄なる野蠻人も遂に其隙に乗する能はざりき然れども稍々時代を閱みするに及びて羅馬の武威行はれず止むことを得ず政略を用ひて蠻人を懐けざる可からざるに至れり其甚に至れるもの又た由來する所をくればわらず抑羅馬の人民は原來二個の大階級に分れたり士族平民是なり此の二族や元來相容れず然れども當初羅馬の未だ強盛に赴かず儻かに以太利の一隅を以て其國を建て力を盡して四面の外敵に當らざる可らざるの時に當りて

の羅馬の人心は外に向つて一致し純然たる共和政の下に其統合をなすを得たり然るに漸く外敵を征服し世界を擧げて殆んど其の版圖に歸するに及びてや外敵漸く弱少となれり於是乎羅馬の人民次第に内部の破裂を生し各派の紛騷日に甚しきに及びては各派互に武力を以て其勢力を支持せんとを圖れり然るに當時羅馬の状況たる民智大に進歩し文物典章元より觀るに足るものありしと雖も久しく太平に馴れて人心腐敗し屢々弱々自から武事に堪へざるを以て武力に依りて自族の勢力を支持せんには勢ひ征服蠻族の力を借らざるを得ず隨て彼の慄慄なる蠻族は羅馬の國內を横行し其人心の腐敗殆んど取るに足らざるを觀て茲に始めて羅馬を侮蔑するの傾向を生し遂には之を蹂躪して曠世の大國を破碎するに至れり以上説く處の如くなるなきは羅馬の滅ぶるや其滅ぶるの日に滅びしに非ず其亡國の兆候は遠くの同國人民が政略を以て外人を懐けしの日に起因し近くは人心の腐敗を極めしに職由せるなり

アーツニー・ブラウド氏は曰く「歴史は反覆(Repeat)せず」と此の言誤てり近く東洋の例を見よ我が日本の史上に於ても其治亂興廢の蹟を見るときは常々同事を反覆

せり殊に支那の如き其歴代の王朝ありて盛衰禍亂の常なきを見れば其全事を反覆せるの例殊に著るじとす曠世の英雄一朝にして勃興し忽ちにして天下を蕩平すれば一時天下の康安を得べし然れども其子孫に及び數世を出てすして政衰へ國亡ふ是れ果して何の故を凡そ治に居て亂を忘れ安逸を貪りて驕慢を來すと
 は是れ人の常情なり此の常情や忽ち人心の沈滞を醸し遂に衰滅の源となる是れ所謂盛者必衰の理にして各國の免れざる處なり羅馬人民の如きも泰平の安逸に馴れ人心次第に腐敗して遂に萬年の幸福を失へり惜むへ可き哉以上説く處の如く盛者必衰の理は各國の免れざる處とるときは他に國家萬年の基を立るゝ道なきか否々決して然らざる可し國民の雜駁ある種々の分子を含有せり一方己に衰ふる者あれば一方必ず盛なる者なり故に建國の組織をして常に盛者進んで衰者退くの制度に依らしむるときは其萬年の安榮を保持するを得るや必せり彼の英國の如き久しく盛運を保ちて衰へず是れ其制度の然らしむる處ならずばあらず

諸子の是迄研究せる古代史の部面に於ては之が主人たるものは羅馬帝國なり

なり然れども自今余の講述せんとする中世史の部面に於ては其形勢全く相變じ史上の主人として常に吾人の耳目に上はるものは是れ野蠻人なりとす其野蠻人中特に歐洲中古近世の史料を撰たせし者は是を日耳曼人種となす可し見よ彼の堂々たる羅馬帝國を倒せし者は實に日耳曼人種なりき又た羅馬覆没の後は歐洲の國土一時頗る混亂を極めたり其混亂中終始歐洲の國土を横行して四面を壓伏せしめしものは實に日耳曼人種なりき於是乎漸くにして歐洲の形勢定まり獨逸佛蘭西諸國の現出するに至りても其國權を乘るの人は種は又た實に日耳曼人種なりき尙ほ細かに各國に付其人種の由來を討尋するときは獨逸は日耳曼人種の本據なれば其日耳曼人種たること謂ふ迄もなく佛國は從來「ゴール」と稱し「ケルト」人の住所なりし然れども后日耳曼人の爲めに其本據を奪られたり英國は元來「ブリトン」と稱し「ケルト」人種の一派なりしも其「ノルマン」人の爲めに威服せらるるに當りては變じて「アングロサクソン」人種(日耳曼人種)となり以太利も亦「ロンバル」
 ヲスなる日耳曼人種の占領する所となり下つて近世魯國の現状を見るも人民の多數は其「スレーブ」人種なりと雖も之が主宰者たる者は日耳曼人種なりとす又た

彼のデンマークの如きノルウェーの外き元來日耳曼人種の本據なりとす歐洲の形勢已に斯くの如く日耳曼人種は實に歐洲の覇權を握れり尙ほ歩を轉じて大西洋を渡り亞米利加の實狀を見るときは其最も勢力ある合衆國人は即ち日耳曼人種をり更に印度洋を航して濠洲の大陸を臨むとき其大陸の要地を占むるは是れ又た日耳曼人種なり印度地方の如きも從來日耳曼人種たる英人の配下に屬しつゝある以上は之をしも亦た日耳曼人種の威令に服せる者なりと謂はざるを得ず夫れ然り吾人中なる以來の世界を見るときは之か歴史の要部を占むるものは常に日耳曼人種たり文明の開創者にして且つ之か先進者たるものは日耳曼人種たり世人か見て以て立憲政体の下に立ち之か十分の運用を試むるを得る者は獨り日耳曼人種なりとするもの蓋し故へなきに非ず然りと雖諸子よ諸子は十九世紀の文明を伴ふを得る者は獨り日耳曼人種なりと謂て落膽する勿れ我か東洋人は立憲政体の下に立つ能はずと謂て自棄するとなかれ諸子知らずや往時歐洲を威服し居ハングリイの地を移住し茲に嚴整ある立憲政体を建てたるハンス人種ありハンスは純然たる東洋人なり然れども一時歐洲

を支配し夙に高尚なるハンス人種と稱せられたり (Noble race of Huns) 果して然れば我か東洋人も亦た日耳曼人種と等しく文明の先進者となり立憲制度の運用者となり得ざるの理なきは又吾人の疑ふ可からざる處なるに非ずや

第二回

初め羅馬の滅裂して東西二帝國となるや歐洲猶ほ主宰者を有せしか故に幾何か其統率する所となり居たり然れども西帝國の一たび亡滅に歸するに至りてや其存する者獨り東帝國のみにして其勢力日一日より減少に歸し遂に歐洲の襟をすて殆んど混沌の狀に陥らしめたり此の間に當つてや歐洲更に非常の出來事なく非常の豪傑なく唯たジャーマン人種が獨り其猖獗の勢を逞しくせるのみありて歐洲の形勢實に蠢々騒々たりしとは蓋し此の時代の現状あり今左に此の時代に於ける重なる人種を列舉し次にジャーマン人種は當時如何なる位置を占めつゝありしかと見る可し

當時歐洲を充たせる人種の重なるもの凡そ四あり一に曰くギリイコーラチン二に曰くケルツ三に曰くジャーマン四に曰くスラブ是なり其他ハンス又はマキ

ヤープなる人種は歐の中央に占居し今澳太利ハンガリー等の地に據れり人種の概略は右列舉せる處の如くなるも歐洲中世史は即ちシャーマン人の歴史にしあれば余は重もに歐洲の一部たる獨逸の歴史を説く可し

抑當時勢力萎蕪せりと雖永く世界の主權を握りたる羅馬帝國の本據たる以太利を蹂躪し遂に之を討滅せしものは誰ぞ是れ則ちシャーマン種族の一種の澳西太利地方より來れるものにして其酋長をオドアサー(Odoacer)と稱し以太利國王ロミユラスチーカスチユラスを廢し自から其王位に即けり然れども羅馬東帝國の代王は猶ほラベennaに在りて以太利の一部を支配せしか故にオドアサーの王國は固より鞏固なる者に非ざりしか後全シャーマン種族の一部たるフストロゴス人の酋長セヲドリッソ(Theodric)の爲めに滅はざる是れ紀元前四百九十三年なり

此のセヲドリッソも亦た久しからずして東帝國の一將に倒され以太利の地暫く東帝國の所領となりしが已にして又た他のシャーマン種族たるロンバーツなる者北方プロシヤの地方より侵來し以太利を蹂躪して其國土を領せり是れ恰も紀元前四百七十六年なりし

此間に於て以太利國には羅馬法皇なる者を生し歐洲の史上に一大變動を生ずるの原子となりしも此事は後回に詳講す可し

西班牙國を併吞せる者も亦たシャーマン人種なり初め羅馬の未だ滅亡に歸せざる以前より此國はシャーマンの一種族たるパンタルスの手に歸せしか后ビジゴスなるシャーマン人種來りてパンタルスを追ひ之をジブラルタルの海峽外に退けビシゴス(Vigoth)は凡そ三百年間西班牙を支配せしか后亞細亞にマホメット宗の起るに逢ひ遂に亞細亞の邦國を略しコンスタンチノールを陥れ猶ほ進んで北部亞非利加の地を略せり

次に講歩を轉して英吉利の有様を見れば全國の住民ブリトンはジュリヤスシイザの配下に歸し長く其治澤に浴せしも後四百十年頃に至り羅馬は其國事の多端なるか爲めに外領國の鎮守兵を引き擧ぐるに至りしより英國に於ては羅馬風に化したる土人は未だ之に化せざる純粹の野蠻の土人(共に本來ノケルト人)との間に攻争を生し初め羅馬鎮守兵のありし頃は山上の高地に據り自然の險を守りて羅馬兵を避けしケルト人も今は山を下りて土人を攻撃するに至りしより土人

は其銳鋒に當ると能はず遂に助をサリソン又はアングロの土人に乞ふに至れり然るに此のアングル、サクソンは初め英人を助くるの目的を以て英國に入込みしも后には遂に其土を占領し各々國を立てアングロ、サクソン七王國を生せしか第九世期の頃に至リエグバート(Egbert)王起りて之を一統せり佛蘭西に於ては未だシャーマン人種の全國に侵入せざる以前に於てはコールなる人種ありて羅馬の配下に屬したりしか羅馬の衰ふるに及んでフランクなる或るシャーマン人種の酋長シロービス(Olovis)なる者來因河を渡りて佛蘭西に侵入し當時羅馬の鎮守たるシヤグリヤス(Syagrius)なる者を攻殺し遂に北方佛蘭西の地を奪ひて自からフランク國王(King of Franks)と稱せり元來シヤグリアスは羅馬領地の鎮守としてフランクの地に派遣せられし者たりしもシロービスの勢ひ當る可からざる者あるより羅馬は遂に之を攻撃する能はず遂に其方略を一變シシロービスを懐けて他の蠻人を防ぐの手段として遂に之を封して羅馬の鎮守(Roman Counsil)とせり是れメロビンシヤン王朝(Merovingian Dynasty)の始めなり

此の一事よりて茲に注意す可き變化の生せるあり抑もシャーマン人種は慄悍なる野蠻人種にして羅馬人とは獨り宗教を異にせるのみならず其風習氣性皆な是を同一ふせず殊にシャーマン人は新に歐洲の歴史上に現出せる新鮮の種族なるも羅馬人は長く歐洲歴史に主人公の座を占め今や已に腐敗に墮せり此の新鮮なるシャーマン人は腐敗せる羅馬宗教を以て之を一睡の下に付す可かりしに左ばなくして却て之を尊敬し新鮮人種腐敗の中より其宗教を吸収して茲に耶蘇教の再活を見るに至らしめたるは之を史上の奇變と謂はざるを得ず蓋し此の奇變の生せしは野蠻人と耶蘇教婦人との結婚之か重なる原因をなし又た野蠻人は其味方を懐くるの手段として耶蘇教の僧徒に依頼せり此の時代の僧徒ハ甚た勇敢なる者にて單身濛昧なる野蠻人の中に入りて其教義を説法し毫も恐るゝ處なかりき

メロビンシヤン王朝は暗君相繼ぎナルテリツ三世を以て終る之に代るものはペロン(シャールマンの父)なり

シャーマン人ノ氣風

往古ジャーマン人の氣質を知らんと欲するも殆んど書籍の徵す可き者少なきより其事の困難なるは人の能く知る所なり唯其本性を叩くときは一種の野蠻人たりしには相違なかる可しジャマイン人の智識なく美術なく又た國を爲して一己の團體を形勢するをなく其状恰も山賊の如く其好む處は戦争遊獵賭博飲酒に外ならず然れども一方よりしてジャーマン人の氣風を見るときは甚た自由を尊へり然れども其自由たる云はゞ自儘勝手とも云ふ可く決して今日哲學上よりして云々する處の自由には非ざりしなり例へば一人の婦を聚らんとするには父母の之を否むあるも朋友の之を尤むるあるも決して之に關係せず唯己れの欲望を到達するとは是れジャーマン人の自由なりし然れども其間自から高尙の風ありて存せり則ちジャーマン人は其一身の不屈を重んずると共に一家の不屈を重んじ延ひて一族一郷黨に及び若し其の一にして凌辱を受くる者あらんか各一致團結して之か報雪を計るか爲めには其生命を惜まざる程なりき此の自由は敢て希臘羅馬等よりして傳承せる者には非ず希臘人は多少の自由を重んせしも其自由の他に影響を與ふるとなかりき羅馬人は其始め自由を尊ひしと雖後廣く外敵を威服

するに及びては唯武斷壓制を事とし毫も自由を尊はさりき去れのジャーマン人種の自由は他より繼承せるに非ずして其本來の特性たるを知る可きなり自由は獨逸の山林より出つと宜なる哉言や

ジャーマン人の組織は平等を尊ひ郷黨各統領を戴き中族中の最剛者を以て之に任せり其少しく發達するに及びては權力上の争ひ等を生せしも是れ全く實地問題より生せる者にして佛のルーソー等の如く空理上に國家を自由にする杯の説を爲す者なかりなり

又た近世に至り婦人を尊ぶ事の耶蘇教の優所の如く説く者ありと雖本來希臘人羅馬人の如きは決して婦人を尊ひし者と謂ふ可からず耶蘇教の僧徒の如き其結婚を禁せし跡より見るときは是又婦人を賤むの傾向ありしを察す可きなり然るに獨逸人に至りては壓制と嫌ふと全時に弱きを助くるの義侠心あり従つて獨逸人は敢て凌辱を婦人に加えず之を尊愛するを以て其美德となし殊に獨逸人種は夙に一夫一婦の制を行ひ婦人は常に夫に従ひて其住居を全ふせり故に軍中と雖婦人は夫を助くるを本務とす現に夫か敵軍と接戦するに當りてや其婦の後軍に在

りて絶叫以て夫の勇氣を助けたりとは蓋し古蹟の傳ふる所なり
 又た一の獨逸人の美風とす可き者は其宗教に熱心なるを是あり尤もシヤーマン
 人は其初め悉く同一の宗教に非ざりし或は太陽を拜する者あり或は又た太陰
 を信する者ありしなり然れども其何れの神を信するに拘はらず其信仰心の一轍
 にして深確なることは他の人種の遠く及はざる所なり後此の人種が耶蘇信者と
 なるに及んては遂に一たひ其腐敗を挽回し後又た舊教の衰ふるに及ひ更に宗教
 上の一大革命をなして再たひ耶蘇教を活潑ならしめたる者も亦たシヤーマン人
 種(マーチン、ルーサー)なり

以上の諸點は獨逸人が遠く他人種に超絶せるの氣象なりとす

第三回

シヤールマン帝ノ統一

シヤールマン帝は中世第一の人物なり其事業の宏大にして成功の雄偉ある之を
 アレキサンドル、ナポレオン及ピピートル、ワシントン等に比す可し史家帝を呼ん
 て中世暗黒時代の燈臺なりと云ふ亦た宜べなり

シヤールマン帝の祖先は元とフランクの貴族に出つ其四代の祖にペヒンゼーリ
 スタム(Pepinthe Heristal)なる者あり頗る豪邁の資を備へたりしか當時フランク國の
 狀勢たるメロビンシヤン王朝暗君相繼ぎ王に權振はす豪族所々に割據し國內分
 れて三足鼎立の姿となる即ち北部をフランクシヤと稱し南をニューストラシヤと
 稱し東をチロストラシヤと稱せり此の三部には各大守(Mayor of Palace)ありて國王
 を代表せしかペヒン則ち其一なり

先是大守の威力を逞しふしてメロビンシヤン王朝を覆滅せしめんことを謀りし
 者ありしも事遂に成らざりしかペヒンに至りて其管領せしチロストラシヤの地
 に據り威力日に盛んに遂にニューストラシヤ及びフランクシヤを併呑し王權を全
 く地に委して有れども無きか如くなりき是れ紀元六百八十一年なり

其子チヤールレス、マーテル父に繼て其職を襲ひしか智勇謀略父に劣らず全く其フ
 ランクの領邑を平定せるか此の時に當り歐洲一の大事變を生し頗る動亂の狀と
 呈せり初めマホメット教のアラビヤに起るヤサラセンの信徒は新鮮の思想と活
 潑の勇氣とを以てアフリカを蹂躪し次第に歐洲に侵入して其鋒銳殆んど當る可

からさるの勢あり然れども當時歐洲に於てもフランクの壯士は已に悉く耶蘇教に化し其生來の剛強を以てサラセンの侵掠者に敵抗し共に互角の勢を以て大にホアチエルの野に戦ひ日夜奮激突戦して六日に亘れり此戦や實に耶蘇教徒とマホメット信者の運命を決する者なりが遂に歐洲人の大勝に歸せり而して之か大ボたり者は實にチャーレス、マーテルなりき於是乎マーテルの名譽恰も朝敵の東天を輝くか如く歐洲至る處呼ひて耶蘇教の救濟主となせり是れ即ち紀元七百三十二年なり

此の出來事よりして一の注意す可き結果を生せり何ぞや曰く羅馬法皇カマーテルを好遇すると甚しきに至りしと是なり抑以太利の地は屢々ロムバールツ人の爲めに侵襲せられ法皇殆んど其煩に堪ふる能はず恰も好しチャーレス、マーテルの威望日に高く歐洲他に自ら比ふるものなきより法皇延ひて已れの後攝とし以てロムバールツ人に當れり是れ蓋しマーテルが彌々威力を増すの媒助なりき
マーテルの子ベヒン、レプゼフ又た豪邁父祖に遜らず父マーテルの志を繼ひて益々法皇を助け以てロムバールツ人を攻め又た其領地を擴めて遠く中央獨逸に至れり

此時に當りメルピンジャン朝の弛頹益々甚しく國民の意思も亦たメロピンジャン朝を厭ふてベロン家を奉ずるの傾向あり於是乎ベロン一策を構へ法皇に問ふて曰く法皇は宗教上の主宰者なり宗教の事は之を法皇の統理に歸せん然れども政事上の事に至りては實際兵馬の實權を握持するもの之を統理して可ならんやと法皇之を許すベロン輒ちチューデリック三世を廢して自ら國王となる之をカルピンジャン王朝と號す此の時よりして歐洲の形勢二派の大權力に分岐す則ち其一は宗教上の權力にして法皇之を總攬し其二は政治上の權力にして國王之を統治せり

ベロン、ゼフレブの子は則ちシャルレマン大帝にして紀元七百七十二年初めて王位に即き其事業の第一着手として北方サクソンの野蠻を征せり次で以太利を攻めてロムバールツ人を平け法皇に捧ぐるに廣大なる法領を以てせり然るに曩きに征服せるサクソン人、シャールレマンの虚を窺ひ謀叛をなせしより轉して再た其地を征し其數千の蠻人を殺戮し遺存せる者には強ひて耶蘇教を信せしめたり

紀元八百年シャールマン羅馬に入りて法皇に謁しセントピーターの寺院に詣せし時法皇は羅馬皇帝の寶冠を以て之をシャールマンに捧呈せり是よりしてシャールマンの所に羅馬皇帝の位に即き幾ど已に亡滅せる羅馬帝國を再興せるの姿を爲せり

シャールマンの事業は獨り戰勝者たるの名譽のみお止まらず之か立法上の功業としては其領地へ布くに一定の法律を以てせんとし其法律の精神は務めてシャールマン人種の氣質に適する者を撰ひたり其行政上の功業としては已に其領内に存せる幾多土着の貴族を貶黜し己れ服心の臣下を以て各地の大守とし以て立法行政の事を兼攝せしむ

尙は其事業の著るしき者を擧ぐればシャールマンは大に教育の普及を計り寺院に付屬せしむるに學校を以てし領内の自由人は必ず其子孫を教育せしむべきの方針を取れり其他商業を奨勵し陸海軍を備へ羅馬舊教を信せしめたり此等の諸點は獨りシャールマンの他戰勝者に超絶せる所以なりとす

シャールマンは獨り創業者たるの才智を抱きたるのみならず又た守成者たるの

拔倆を有せり其爲す所偶々殘忍暴戾の舉動なきにしもあらずと雖所謂大功は細謹を顧みざるの譬に泄れずシャールマン帝は其絶大の事業を遂げんか爲めには瑣々たる微瑕を顧みるに違まなかりき然るに些少の瑕瑾あるか爲めシャールマンを譏る者の如きは是れシャールマンの胸中別乾坤の存するあるを知らざる者なり或人はシャールマン帝を稱して獨逸人種の標準と稱せり抑も獨逸人種の氣象たる耐忍剛毅能く小事を忍んで大功を立つ是れ實にシャールマン帝の人と爲りと符合せる者なり

シャールマンの事業は廣大無邊にして其性質の偉大なる夫れ斯くの如し然るに其一朝溘然として地下に入る曉に至りてや廣大の領土四分五裂し立法行政其他百般の事業一として其目的を達する能はざりき是れ果して何等の原因にか因る他なし凡そ國家の進歩と整頓とは百般の事物皆に自然の進運に達せるの後に於て始めて之か功を奏す可き者にして如何なる雄略家ありと雖如何なる卓見者ありと雖苟くも國家自然の進運か其人の雄略卓見と一致するに非されは決して一人の智勇を以て國家の整備を計る可からざるなりシャールマン帝の事業忽ち廢頽

に歸したるも亦た此の理數に泄れざる者にして其の死後全く烏有に屬せしは其時世の進運シャーレマンの才智に伴はざるか爲めのみ果して然れば其事業の破綻せるは罪時世にあり決してシャーレマン其人を尤む可からず

羅馬東帝國

(本條及び次條は文學士辰巳小次郎君講述する所に係る但し順序は前講師福富君の後と承る者さす)

羅馬東帝國は初めバイザンタイン帝國と云ひ又希臘帝國と云ふ一は帝都バイザンタインに基き一は歴山大王の經營係れる希臘亞細亞混合の開化に本ける名なり羅馬帝國東西に分れし時東西帝國は全く其文明を異にせり即ち東帝國は希臘の文明に依り西帝國は羅馬古來の文明に依れり而して西帝國はA.D. 四百七十六年亡しか東帝國は其後久しく永續したり然れども常に衰頹の姿を現し終にA.D. 千四百五十三年を以て土耳其人の爲め亡ぼさる東帝國の歴代中幾分の勢力を有したるは英主ジャスチニアン帝の時にして帝はA.D. 五百二十七年位に即ち五百六十五年に死せり帝大に土木を好み殊に「セントソフイヤ」の寺院を建るを以て名あり尙一層帝の名を高したるは羅馬法律の編纂なり國初以來帝の時に至る迄一定の法典をかしければ時の法律家に命し拾貳銅票以後に發布せられたる法典を

輯め之か精神を尋ね一定の法典を撰ましむ是れ今日の所謂羅馬法(Civil Law)なり此法典は歐洲諸國中獨り英國を除くの外皆依て法典を定むる處の模範なりナポレオンの法典と云ひ範を佛普等に取りが故に其源に遡れば遠くジャスチニアンの法典を酌むと云ふべきなり

因に曰く英國の法典は所謂習慣法なり故に一定の法典を備へず
ジャスチニアン帝ハ唯法律土木上に於て有名なりしのみならず伊太利の一部を復し亞弗利加のペンダル國を代つを以て名あり帝崩して後ち東帝國の事亦觀るべきものなり

サラセン人

さらせん人とはマホメット (Mahomet) と云へる一大宗教家の指揮に従ひ廣く土地を攻め取り強盛の政略を有せし者なりマホメットはアラビアの(Mecca)府に生る學者或は其生年をB.C. 五百七十年とし或五百七十年一とすマホメット年四十の時初めて其名世に聞ゆ其以前は通常一般の人にして資産も富み商業に従事したり動もすれば冒險の事ありしと雖其行爲に於て不徳義なく其言ふ處不信なしと稱せ

られたりマホメット生來書を讀み之を綴るの才なしと雖も其商用の爲め廣く諸方に旅行したるを以て大に見聞を廣めり其後屢は山間に退き思を宗教道德の事に潜め終に一神宗教を案出せり一日其親戚を招き告て曰く予は天帝の命に依りアラビヤ全國の宗教を改良せんとす思ふ猶太教邪蘇教は共に天帝の命に依て開きたる者なれども今予の開かんとする宗教に比すれば霄壤の差あるべしと因て親戚知友をして偶像を捨て唯一神教を奉せしむ實にマホメットの一大宗教發明者にしてアラビヤの諸人種にして從來の分裂し居りたる者を統一して一大國民を形くれりマホメットの宗教は邪蘇教を取捨しアラビヤ舊來の宗教思想を改良し以て新お成れる處なりアラビヤ舊來の宗教思想は極めて粗末なるものにして總て偶像を拜し天体を祭りしなりマホメットの所説は后人之を傳へて經典とあし名けて Koran と云ふ Kolan とは讀本の意なりマホメットの信徒其宗教を名けて Islam と云ふ Islam とは濟度の意なり

マホメットの其教を説くや最初に之を聽きしものは其妻并に二三の近親なりしが後漸く之を聽くもの多きに至れり Medina 人其の説く處を聽きて大に畏れ國風

を紊亂するの狂人となし之を殺さんとすマホメット僅に身を以て逃れ(Medina に出奔す時に)六百廿二年七月十五日なりアラビヤ人此年月を Hegira と稱し其國曆の紀元とす此年月は記應を要す) Medina の人厚くマホメットを信じ布教をして自由ならしめたり是に於てマホメット其性質を一變し即ち布教の法を一變し論説を以て布教するを止め干戈を以て布教を始めたなり叫んで曰く劍は天國地獄の門を開閉する所以の一なりと是よりして諸國相續いてマホメットノ攻略する處となり十年の間にアラビヤ半島舉てマホメットの臣民となり人民自ら誇りて曰く Caliph (眞信者)の國民なりとマホメットはアラビヤ人の力によりて諸國を征服せんとしたれども不幸病にて歿す時に)六百三十二年なり其權力を傳承して教徒を指揮せしものを Caiph と云ふ初代の Abu-beher マホメットの眞にして Caliph と云へる人なりは皆を宗教政治上に於て權利を專ふしマホメットの性質氣象を傳承して布教と攻伐のみ從事し世界を擧て其教を奉せしむ其至る處に於て人民に撰ひしむるに教税劍の一を以てせしむ教と撰ふ者の改宗して回教徒となり税を撰ふもの年貢を出して降伏の意を示す教を奉せず税を出さざるものは

殺戮せらる斯の如き宣教攻代の法ハ Caliph が亞細亞亞弗利加の大半を占領し歐洲に入るを得し所以なり其の第一に攻めたりしは羅馬東帝國が亞細亞に有する領地にして次きに取りしは波斯印度の兩國なり回々教徒東羅馬帝國の首府コンスタンチノーブルを攻め圍むとに二回なりしも常に追退けらる其尤も恐れしは所謂 Greekfire なり回教數年劇戦してアフリカの北部を定め、七百十年終つシブラルタールの海峡を渡りスペイン國に入る時にスペインはビジゴッス人種已に土着して國を爲せり回教後戦勝ちてスペインの大半を領すビジゴッス人種退て全國の並部の山間に據る回々教徒尙以て足れりとせず北境の山脈を超て佛國に入る向ふ處敵なく佛人國を擧て將お下らんとす(此時佛國はふらんと稱し人民はふらんと稱す)偶私國の名宰相チャールス、マルテル大軍を率て Four's Polders 間回教徒と劇戦し七日の後大に回教徒の軍を敗る時に、七百三十二年あり是より回教徒亦歐洲の内部に入らずチャールスの武功大なりと云ふべし世人之を稱揚して「マーテル」と云ふ「マーテル」は随の意にして其の能く強敵を挫きしか故に此名あり回々教徒終に歐洲内部に入るを得ずと雖イスパニアに土着し王

國を建つ其後七百年にして亡ぶ即ち A.C. 一千四百九十二なりコロムブス米國發見と其年を全くす

回々教の領地は一時非常に廣大を致せり西はスウイデンより東は印度に達す此廣大の領地を支配するものは一人の「カリフ」なり然るに之を暫くして主權相續の爭論興り變して戦争となり大國分れて東西となり東國はマクダット府を以て國都とし西國ハスペインの「コルドバ」を以て國都とす時に A.C. 七百五十九年なり東國の Caliph 中最も名あるは「アロン」(Aaron the Just) と云ふ人にして「シャールマン」時を全くす此人の事「アラビナイト」物語中に詳なり其死後國內分裂し州郡背反するもの多く A.C. 十一、十二の兩世紀に至り土耳其人の亡す處となる

スペインに於ては A.C. 十一世紀に至り「サラセン」人即チアラビ人は勢力を失ひ回々教を奉ずる「ムアール」人種之に代りて力を振ふ「ムアール」人種はアフリカ北部の人種にして「サラセン」人に従へられし者なり此人種「サラセン」人に従てスペインに入りしか此に至り之を壓して權力を奪ふ回教徒は歐洲中世の文明史上に著響を及すと大なり歐洲諸國の人蒙昧野蠻なるに回教徒は獨り學術技藝に進めり「コルド

バ府並にバクダッド府の學校は互に競争して學術を研究し古書を蒐輯せり歐洲文明の回教徒に受る處の恩澤少からず唯惜むべきは歐洲人と回教徒は言語宗教を異にするか故に其願響十分なるを得ざりしとなり

佛曼伊三國ノ紀元

チャールス大王の勢力は長く存すと雖其帝國は長く存するを得ず帝國は一の宗教を有し一の政治を有し以て人民を統一するを得たりと雖言語法律の上に於ては一ならずして人民の間に不和を存せり Galla Roman 人並に伊太利人は「Romans」を用ゐセルマン人は「Cheritonic」を用ゐたりチャールス大王はロンバルド人サクソン人其他の人民に其國固有の法律を奉ずるを許せり能く此等數萬の人民を統一して以て一大帝國を成すを得たるは大王の名望政略に由る其一是國內錯亂分離の兆候なり帝國內に前に言へる如き破裂の原因あるが上に大王の族人大望を懷き相讓るを知らずして相争ひ相闘き以て帝國破裂の原因を増せり大帝ど人種を全せるアウストレヤノフランク人の帝國の一統を欲したるも帝國の西部にゐるガルロローマン人并に東部にゐるチェイトレ人は獨立し新國を建

んと欲せり

大王死し少子ルイ(Louis the pious) 諸兄早く死したるを以て位に即くルイ帝王たるの才略なし帝國を三分して其三子に分つ三子はローサーペピンルイスと云ふ王の後妻皇子を生むチャールス(Charles the bald) と云ふ王之に地を與へんと欲し諸皇子の地を收め更に地を分つ時に八百二十九年あり三皇子大に怒り王に反して兵を擧げ王を退けチャールスと其母とを寺院に幽す第三の皇子ルイ自ら非を悔ひ戰を休めサクソン人并に東部のフランク人共お王を扶け位に復す一時争止むたりと雖も諸皇子亦反し法皇グレゴリー四世と合体し王と戰て之を擒にし之をして公衆の前に於て自ら其罪を述べしむ是に於て王又縛を解かる然と雖争亂と分離とは相接して起り王の身を終るゝ至る王死して諸皇子大に争ひ終に帝國を三分し帝國三分の條約をバードンに締ふ時に八百四十三年なり

皇子ルイは東部并に曼國のフランク人ニ君臨しチャールスは西部并に拉丁開化のフランク人に君となれり此二人皆王を稱すローサーは帝位を有しチャールス大帝の帝國中の中央を取れりルイの人民は皆曼語を用ひチャールスの人民はガ

ルロローマンス語を用ひローサーの人民は此兩語を用ふ是に於てチャールス大王の帝國の名義上にハ一の帝國にして一の王家に於て帝國を三分し天下の人に對し之を分離せずと公言すれども其實帝國は三個に分裂したるなり

チャールス大帝の死後一人にして其帝國の殆ど全体を治めたるものは獨り Charles the fat であるのみ其在位八百八十四年より八百八十七年に至る帝人となり暗弱にして大國に帝たるの資なくノルマン人(一名 North men) テスカンデナビアの群賊なりが其帝國を侵掠するに至り力を盡して之を拒くと能はず八百八十七年終に廢せられて日耳曼初代の帝ルイの孫 Arnulf 死し子 Louis 幼帝立つ Louis 幼帝死し Charles 大王の血統日耳曼帝國に絶ゆ時に九百十一年なり

フランスの王國に於てハチャールス大帝の血統路易五世の死と以て絶ゆ實ハ九百八十七年なり是より先き國王は代々勢力を失ひ貴族の内フランス侯漸く勢力を張るに至れり其他の諸侯亦勢を増せり九世紀の末に至り巴理伯(Count of Paris) コード國敵を擊却して人望の歸する處となり諸侯の爲めに奉せられて王となる爾來凡そ百年間國王となるもの或はコードの子孫より出で或はチャールス大帝

の子孫より出づ是に於てハ諸侯黨國王黨あるものありて國王の撰定と争ふ九百八十七年國王路易五世死しフランス侯 Hugh Capet 諸侯の勸に由り帝位に登る即ちフランス侯初代の曾孫なり其即位するや Orleans 府の大僧正王冠を加ふ是よりして佛國の王家 Capetian 家起り且つ眞の佛國起る是より以前はフランス國なくしてフランス國あり Hugh Capet 即位せしとき國內に主權を握れる諸侯多く就中ハ諸侯ハ力最も強く土地最も大なり是等諸侯は敢て國王に抗禮し自ら國王と全一視せり然れども佛は年代を歴るに従て諸侯漸く勢を失ひ王室従て力を得るに至れり

日耳曼は全く之と反對せり帝王の權は元來廣大なりしが故に諸侯は勉めて之を滅殺せんとしたり佛國ハ於てカペシアン王系は永續せしが故に王位は自ら世襲となれり之に反し日耳曼にては王家の交迭頻煩なりしを以て王位ハ公撰となれりチャールス大帝の血統絶てより日耳曼は帝を置かずして王を置く

Louis 幼帝の死後五大侯會合してフランスコニヤの侯コンラドヲ撰んで國王となす此五大侯の内ハ武門の諸侯あり教門の諸侯あり斯くして日耳曼國は公撰王

國となる國王を撰む權世襲となり此權を有する諸侯ハ力大なりコンラード王は
 大諸侯と權力を争ひ延て久きに渡れり諸侯は常に王國を好まずと雖實際之を置
 きたる所以は他なし第一國家の名譽を永久に傳へんと欲すると第二王をして外
 敵を拒くの任に當らしめんと欲すると是なり (以下棚橋文學士續講す)

萬國史學講義

文學士 棚橋 一郎

シヤールマン大帝崩後の帝國

シヤールマン大帝崩じて其子ルイゼ、バイアウス位ふ即く子三人あり長をローサ
 ル次をルイ復其次をチャールスと謂ふ帝暗弱にして國家を治むるを能はず三子
 をして分ちて各々其一部を領せしむ三子滿たず悉く其父の地を分領せんを謀
 り數ば亂を作す已にして帝崩ず三子則ち悉く其地を分ち尋で互に之を統一せん
 とを謀り争久しく絶えず紀元八百四十三年ベルダンの平和條約を以て漸く其局
 を結びローサル終に帝冠とフランス及びイタリア王國の一部とを得たり之をイ
 タリーゼルマンフランス三國の紀元となす以下請ふ次第を追ひて其略史を述べ
 ん

イタリア王國史

ローサルのフランス及びイタリアの一部を得るヤイタリアの領土は之を其子ル
 イ第三世に授け之をして皇帝と稱せしめしが皇帝は直に兵を以てイタリアの北

部に入り當時其南部に侵入してベチペンナムサラルナムチーブルス等ヲ恐嚇し羅馬の古都をも蹂躪せんとするの勢を示せるサラセン人を退け終に東羅馬皇帝と結んで其海軍の力を借りサラセン人所有のバリー府を陥ぬれたり然れども皇帝がイタリーに於ける勢力は案外に盛大なるを能はず後ベチペンナム公と戰て其の擒にする所となりしかばサラセン人の勢力は依然として衰へザルイの叔父チヤールスセポールドが皇帝となるに及び羅馬は彼の陷ぬるゝ所となり法王ジョーン第八世はサラセン人に租税を輸するの状況となり

此時に當り東羅馬帝國は其勢力をイタリーに恢復するに汲々たりしが斯くカロピンジャン(シヤールマン帝ノ血統)帝統の勢力を失へるは是れ實に好機を我に與へたる者なりとなし數ば兵を發してイタリーを侵し多く其地を奪ひたる後パトリシアン(後にカタパンと稱す)と云ふ官吏をして之と領せしめたり而して當時イタリーは王位繼承の争ありて内國一致するを能はざりしかば東羅馬皇帝は爾來一世紀半の間其權力をイタリーに維持することを得り其のイタリー内國の統一すると多く紛々として亂れたる者は實にシヤールマン大帝が一定の法規を確立せ

す各州をして皆其從來の制度を持続せしめ單に政事上及び軍略上に於ける我天賦の才能を利用し苟且儉安の政略を施して之を統御したるに由れりと謂ふ如何にとなればシヤールマン大帝は元來英雄なれば如何に各諸侯が獨立し得べき機會を與へられるも容易に進んで之を實行し得るの恐なきも已に彼等に自治の制度を許し彼等相互の間に於ける關係并に中央政府に對する關係を密ならしめざる以上は之が長たる者にして其勢力を失ふ時は支離分散復其命を奉ずる者なきに至るは勢の止むべからざる所なればなり而して是れイタリーの内國が帝の崩後に於て全く諸侯割據市町自治の狀体となり暗主の統御に服せざりし所以なり此等諸侯中の強大なる者はフリウリ侯タスカニー伯ミラン公等なりき

已にしてチヤールスセポールド崩しセルマン王ルイの皇子カロマン入て其位を奪ひ法王ジョン第八世に迫りて皇帝とならんとせしかば法王は遁れてバルゴンヂー侯ポリーに投せしがカロマンの崩後其弟チヤールスセフアット再ビイタリーに入り終に法王に迫りて皇帝となれり然れど皇帝は諸侯とサラセン人とに對して其勢力を振ふと能はず國益す亂れしかば帝の崩ずるやカロピンジャン

ン王統の嫡流は全くイタリアを失ひたり

カローピンジャン王統の斷絶するやイタリアはセルマン王國の羈束を脱却して
 イタリア人を王位に就かしめんとせり、其候補者をベレンガルギドの二人とな
 し二人は互に争を爲せしが結局ギド一勝を占めて皇帝となりしかばベレンガルは
 之を遺憾となしセルマンのアルナルフを招き致してギドに抵抗しギド皇帝
 の崩後其子ラムバルトは終にアルナルフの爲に其位を奪はれたり然れども是も僅
 にして崩しベレンガル帝位に登りしがタスカニー伯はブレベンス侯ルイ(バルガ
 ンヂー侯ポツの子)を呼びて之を奪はしめ已にして又之を亡ぼしてベレンガル
 を立てたり是より以來皇帝の位は數多の候補者の競争物となり其争更に絶えざ
 りしにノールスマンサラセン人ハンガリー人等頻りにイタリアに侵入して國家
 を蹂躪し而して法王の行好らず輿望を撃ぐの力なかりしかば國內の亂日に益す
 甚しくアルピア公ベレンガル(前のベレンガルとは異人なり)の位に即ぐに及びせ
 ルマン王オトトト來り侵してイタリアを併せ終にホリーローマンエムパイアを創
 立せり實に紀元九百六十二年なりイタリア國の土王是に至りて其統を絶てりし

四〇

七三

オトトト皇帝の登位はイタリア國の帝冠を以て再びセルマン王の所有に歸せしめ
 たる者なるが此事は西羅馬帝國の價值を以て却りて從來より重からしめたる者
 と謂はざるべからず如何にとあれば是迄の如くイタリア國の諸侯か帝冠を戴け
 る間は西羅馬皇帝は名目のみにてイタリア國一部分の王たるに過ぎざれど今斯
 く充分なる兵力を有し歐洲全國に勢威あるセルマン王の其冠を戴くことになりた
 る以上は皇帝の勢力も自から盛ならざるを得ざればなり然れ共イタリア國民が
 セルマン國王の下に服するを惡み自國の王を立てんと欲するも亦是れ自然の勢
 なれば法王ジョン第十二世は此心を利用して己の利を計らんと欲しオトトト皇帝
 のセルマンに歸國するや直に人民を煽動してセルマンに叛かしめしが其事成ら
 ざりてオトトトの廢する所となりレオ第八世オトトトの爲に立てられて法王となれ
 り

オトトト第一世は斯の如く勢力をイタリアに得し東羅馬に對しては充分に其力
 を伸ぶると能はず其子オトトト第二世も亦父の遺志を繼ぎたる迄にて志を得ると
 能はざりし然れば羅馬人は此處に乗りて獨立を定めんと欲しオトトト第三世の立

て幼弱なるに及びシレセンシアスと謂ふ人を立て領政官コンサツルとなりて共和政府を設立せしが紀元九百九十六年オトリーの兵を率て羅馬に入るに及びシレセンシアスはセイントアングローの城に圍まれ幾もなく降りてオトリーの殺す所となれり是に於てかオトリーは勢に乗りて東羅馬を併呑せんと欲し其の第一着として法王の權力を弱め羅馬を首都として古代の如く全世界を統御するの基を立てんとせしが皇帝も亦人の爲に毒殺せられて事を遂ぐると能はざりき而してオトリー三世の死は大にロムバルド諸市府の力を強めたりと謂ふ元來此等の市府は前代より幾分か自治制度を維持し皇帝に對して租税を輸すの義務は之を負しも第十一世紀には領政官の支配を受けコンシグリオ、ヂンレデンザと稱する會議とグレート、カウンシル則ち元老院とを以て立法上の事務を行はしめ因て以て非常の勢力となりオトリーの繼統者を立てんと欲するも各々其の好む所に従はんと欲し兵力を以て互にイタリアを蹂躪せんとの志を立てイタリア人、グリーク人、スウハビア人等を打破りて南部イタリアの地を略し終には法王をも擒にするに至れり然れど彼等は已に耶蘇宗徒となりたる人民にし法王を尊信すると神の如くなりしか

七四

七五

ば斯く之を擒にしたるも決して無禮を加ふるとなく却て彼等か奪ひたる土地は之を法王より與へられたる領地と見做し危急の際には其報謝として法王を保護すべき約をなし大に法王の權力を強めたるのみならず彼等が東羅馬領の商業市府、チープルス、グイタマルフォ等を介して地中海上商業の大權を失はしめりより北部イタリアの市府ゼノア、ベニス、ピサ等の市府は大に富と權勢とを益し有名なるレバントの貿易權も之を掌握するに至れり是れ彼等が獨立自由の精神を惹起し後終に自由市府の設立を爲すに至りたる所以なり夫れ斯の如く耶蘇宗内の壞亂はレオ第九世以下の法王が其流弊を禁壓したるが爲に大に滅殺せられ而してノルマン人のイタリア侵入の一時イタリアを亂したれども之が爲に却て法王の勢力と市府の富強とを益せしが皇帝は却て之が爲に大に其勢力を殺るとに至れり勿論ヘンリー三世皇帝が耶蘇宗内の腐敗を救済したるは全く宗門の勢力を借りて夫の制し難きイタリア疾伯の忿争を止めんとしたる者にして皇帝は之が爲に法王の權力を強め我愛とならんとを恐れ法王は悉く皇帝の準許を経て其職を就くの制を設け以て耶蘇教を羅馬皇帝が其僭土を

支配するの器械たらしめんとしたるをなれど如何せんノルマン人等の助を得て法王の權力増長するや法王は皇帝の下に在るを耻づるの念を起し終に皇帝と法王叙任の權を争ふに至りしなり而して此争を起したる法王の之をグレゴリー第七世と稱し其原名をヒルデブランドと謂ひ雄才大略を備へたる人物にして力を僧職の賣買僧侶の婚姻の二弊を止むるとに盡し僧位僧官の全く才力と能力とを以て之を取るべき者となして以て僧侶社會の無識を救ひ千〇七十五年其の法王の職に即きたる以來専ら皇帝に附屬せる僧官叙任の權を剝奪せんことを務め終に之を天下に公布し爾來僧侶の一切俗人より其官位を受くべからざることを定めたり然るに其際にはヘンリー三世已に崩じて其子ヘンリー第四世王位に在りて相争ひしが其王位の終にハマリア族ヘンリーの有となりたり但しヘンリーも甚た勢なき君主にして充分にイタリアの清讜を保つと能はざりき

千〇二十四年コンラッド第二世セルマンの王位に即くミランの大僧正之をイタリアに招き王位に即かしむ時にイタリアの諸侯伯爵正等各々兵力を以て其強を争ひ而して市府の勢も亦益す盛なりコンラッド大に之を憂ひ大諸侯と大僧正等

が勢に乗じて他の小諸侯等を吞并するを拒ぎ以て此等の内亂を鎮定せんと欲し命を發して曰く爾來諸侯の領土は純然たる世襲たるべく如何なる理由ありとも法律上其所領の不正なるを證明せらるゝか同列一般の輿論が其の不正の繼續たるを承認せらるゝかに非ざれば諸侯は父祖より譲られたる領土を棄却するの義務なげんと實に千〇三十七年なり然も皇帝の勢力弱かりしを以て充分に其私闘を禁壓すると能はざりき

此時に當り羅馬法王たりし者何れも不徳にして大に法王權の衰微を致し幾んど救ふべからざるの狀体となりしがコンラッドの子ヘンリー第三世の世に知られたる豪傑なれば流石に此疲弊を救済するの方策を案出し法王は悉く皇帝の撰定を受くるとどなし才識あるセルマン人を擧げて其職に即かめたり但し其方策も初年の間は充分の功果を得ると能はざりしがレオ第九世法王となるに及び稍其實果を擧ぐるに至れり蓋し當時耶蘇宗内の最大なる流弊は僧職賣買の事と僧侶の婚姻とにして僧職の賣買は實力なき僧侶をして權勢に居らしむるのみならず諸侯をして僧職の撰任に容喙するを得せしめ僧侶の婚姻は是れ亦僧職を世襲

せしめ不徳の僧侶が其職を汚るゝをなごありて大に俗世間の尊信を失はしむる傾ありしをレオ法王は之に大改良を加へたるが故なり然れど多年の習慣は一朝にして之を禁ずると難くレオ并に其後の法王たりしグレゴリー第七世の如きも頗る僧侶社會の反對に逢ひ一時は之を處するに困したりと云ふ

然ればイタリーの内部は其擾亂實に甚しく更に統一すべき状態なかりしに茲に又其擾亂をして一層を加へしむべきの事件起れりノルマン人のイタリー侵入是なり元來ノルマン人は以前よりイタリーの侯伯を助けて其戰を爲さしめ或は東羅馬の勢力を挫きたりしがレオ第九世の時に至りて彼等は却て甚だ法王の恣横なるを憤り右法王の詔命に對し敢て敬意を表せず却て法王に對して其罪を問はんとするの勢を示せしかば法王も亦大に怒りてヘンリーを宗外に放逐し其臣民にして之に叛する者あるも法王は決して之を叛逆と認めざる旨を布告せり是に於てかヘンリーは其處置を忍ぶと能はず紀元一千〇七十七年兵を擧げてイタリーに入り大に法王に向ひて爲す所あらんとせしも弊害の改良以來耶蘇宗門の勢力大に増加し信徒の法王を奉ずると古に異なりしかばヘンリーの詔に應ずる者

欠

MISSING

少なく殊にセルマン内部の諸侯にして皇帝の勢力を弱むるの機会を窺へる者此機に乗じて亂を作せしか故にヘンリー進退谷まりグレゴリーの在城カノッサに至り單衣庭中に立ち寒風肌を傷るの苦を忍ぶと三日僅に法王の許可を得て再び宗門に歸入するに至れり

然れどミランラベンナ等に於てはグレゴリー第七世の嚴酷なるを厭ひ寧ろセルマン皇帝の統御に服せんを好むものありしが爲に法皇の勝利は一瞬の間に止まりヘンリー第四世は千〇八十年を以て二たひ伊太利のロンバルヂヤに入りマシチニアの戦に大に法王の軍を敗り尋て法王をセントアンゲロニ圍み千〇八十四年を以てクレメント第三世を立てて法王となしたり是に於てかグレゴリーの生命は殆ど旦夕に迫りしか幸にしてノルマンディー侯ロバートが其弟ロージヤと共に來てグレゴリーを援けしかば皇帝も終に其軍を退けたりしが猶ほ此戦はグレゴリー第七世の死後まで引續き容易に治まるべき状態なく法皇黨は頻にヘンリーの子に嫉してセルマン内部に反逆を興さしめしかばヘンリーは其統御に困み千百〇六年を以て幽閉の中に崩したり

ヘンリー第四世崩してヘンリー第五世繼ぐ帝は實に法王黨の爲に嫉せられて其父にさへ叛きたる程の人物なれど固より法王に對して忠義を抱くべき筈なく其の立ちてセルマン王たるや直に伊太利を侵入し法王パスカル第二世に迫て皇帝の位に即さし其勝利も亦一時の事にして國內大に亂れババリア侯ウエルフの如きハ最も劇しき敵手となり二たひ法王と權を争はざるべからざるの状体となり而してノルマン人も亦來りて法王を助けしかば其争は何の時を待て局を結ぶべきものなるかを知らざりし是に於てハ皇帝も法王も殆ど其争の絶えざるに苦み千百二十二年ウチルムスに大會議を開き互に一步を讓て其局を結ぶの約をなし皇帝ハ指環と節とを以て法王を叙任するを止め法王はセルマン國內に於ける宗徒ハ皇帝の叙任を受るとを承諾せり是に因て法王皇帝多年の争も漸く其終を告げしが是より皇帝の權力は太に伊太利に衰へ隨て伊太利の獨立市府は漸く相結てセルマン皇帝に抗抵するを得るの勢となりロンバードにハミランの自治政府起リタスカニーにはフロレンスの自治政府起リ第十二世紀の上半に至ては漸く其領土をも廣むるに至れりピサの勢力を得たるも亦實に此時に在り

千百三十六年ヘンリー第五世崩して子ナサキツニー侯ローザセルマンの選侯及びババリアのウエルフ侯に推されて皇帝の位置を占む而して當時の大諸侯ホーヘンストヘン家大に之を争ひ法皇はローザを援くローザの黨派を「ゲルフ」黨と稱し「ホーヘンストヘン」の黨派を「ギベリン」黨と稱す是れ「ゲルフ」「ギベリン」兩黨の起原にして「ゲルフ」黨は其初ローザヲ助けたる者なりしに後轉して法王黨の名稱となれり而して此二黨の分立は獨りセルマンのみならず伊太利も亦此二黨派の間に分れ從てインノセントを法王になさんとする者ありアナクレトを法王となさんとする者ありしか其結局サツン侯ローザの勝利に歸しインノセント遂に法王と仰かるゝに至れり然れど法王は其後ノルマン人の爲に再び伊太利を侵され終に其の擒する所となりしかノルマン人は前にも述べたる如く耶蘇教を信するを篤き人民なれば敢て禮を法王に失せずローザの崩後スワビア侯フレデリック第二世の弟コンラッド立ちてセルマン王たるに及び能くインノセントを助けて東羅馬皇帝と西羅馬皇帝とに抗せしかばコンラッドも大に之に困み終に東羅馬皇帝マニユエルに結ひて法皇及びノルマン人に抵抗せり

法王インノーセントが其敵たりしロヂェル王則ちノルマン人と力を併せ東羅馬皇帝とコンラッドとに抵抗して勢力を得たるとは前述の如くなるが法王は此の如く皇帝に對して其勢力を得たると同時に却て大に伊太利に於ける勢力を失ひアルノールト、ラブ、プレッヤと云ふものと爲めに非常の攻撃を受け後にはコンラッドに向て伊太利の保護を托せんとするに至れり然れどコンラッドは内部に事多くして其請求に應ずると能はざりしがコンラッド崩マフレデリック、バルバロッサ後を承るに及び千百五十四年を以て伊太利に入り伊太利の諸市府に向てゼルマン皇帝の權力を定めんと欲しミランの如く皇帝の權力を奉ずるを肯せず飽迄も自治制を維持せんと企つる所の市府を討ちハドリアン第四世法王に迫りて帝冠を受け其報酬として法王の宗敵アルノードを討滅し因て以て法王と結合せり是に於てか法王と皇帝との間は数年の間極めて親密なりしか宗教の首領と政治の首領と相互に長たるを争ふは勢の已むへからざる所なるか故に幾もなく法王と皇帝との感情は漸く冷淡となり皇帝が「カウンテッス、マチルド」の所領を得んとしたる時も法王は拒て之を與へざりしのみを知らずノルマン王ウヰルリヤムと盟

約を結ひて伊太利は西羅馬の皇帝に對して獨立の地となれりと布告し其争容易に止まざりしか千百五十九年アドリアン第四世法王崩しアレキサンドル第三世とピントル第四世とか法王の職を争ふに當りて帝はピントル第四世を助け將にアレキサンドルに向て一撃を試みんとするの勢をなせり然るにロンバードの市府は此時迄も尙ゼルマン皇帝と威權を争ひミランの如きは爲に非常の苦難に遇ひしも敢て屈せず千百六十五年以後是迄皇帝を助けたる市府が獨立の精神を起すに及び之と結合して有名なるロンバードの同盟を形づくり以て大に西羅馬皇帝に反對せしかば皇帝はアレキサンドル法王を討ずるの迫なかりしのみならずミランとの戦況も爲に一變して其勢力日に衰へ千百七十六年レクナノの戦に皇帝の軍は全くミラン人の爲に敗亡するに至れり是に於てか皇帝とロンバード市府との平和條約整ひ從てフレデリック皇帝とアレキサンドル法王との間も平和の結約を見るに至り數年を経て相憎むの情益々減するに及び千百八十三年コンスタンスの條約を以て皇帝は終にロンバード同盟市府の自治制を認可し同盟市府の表面上皇帝の屬地と稱するとなれり然れど是等同盟市府は互に凌駕せん

とするの傾向を示し之が爲に自他の勢力を弱めしが故に其後も全く皇帝の抑壓を脱すると能はざりき

已にしてフレデリック十字軍中に崩し子ヘンリー繼で西羅馬帝となる時に伊太利に於けるノルマン王國はタンクレッドを立てて王となし以て皇帝が其王位を得んとするの要求を拒みしが王崩するに及んでノルマン王國全く亡ひヘンリーの地は全くセルマン皇帝の附屬となれり是に於てかヘンリーは部下の武人を遣して伊太利諸地方の侯伯となし壓制を以て大に人民を苦しめしが千百九十七年皇帝の崩するに及びセルマンの侯伯ハットの弟ヒリップを立て王となし法王黨はヘンリー、ゼライチンの子ハットを立てんと欲し伊太利及びセルマンに於ける皇帝黨と法王黨との争再び起りイタリア北部の市府ハット率ね獨立せり然れど此戦は其極終にヒリップの勝に歸し一旦はイタリアに利ならざりしが千二百〇九年ヒリップ崩するに及びハット終に即位するを得たりしかば伊太利北部の自由市府ハット益々獨立の基礎を固くせり但し獨立市府の勢力を得るとは伊太利の諸貴族に向て好まざりからざる事なれば大諸侯は率ね之か敵となりしも小諸侯は到底市府

に敵すると能はざるを計り先づ之と連合して漸々に市府の權力を握りたり是れ伊太利の自治市府が漸く寡頭共和政府の形をなすに至りたる所以なり彼のヴェニス人ハットを十字軍に假りて東羅馬を襲ひ一旦コンスタンチノープルを陥れて數年の間東羅馬帝國の命脈を絶ちしは實に是等の市府が寡頭共和政府の形をなし武力を以て勢を張らんとしたるの時に在り

ハット第四世は前にも述べたる如く法王黨の立る所にして法王と親密なる皇帝なりしが其の漸くロンバード市府と親密なる關係を生ずるや復之に備ふるの必要なきを見てカウンテツス、マチルダの所領と法王領のヴェンリーとをセルマンの附屬となさんと企つるに至れり是に於てか法王との不和再び生じ從てスロピヤ家を奉せんとするセルマン諸侯反逆の口實を興へしかば國內大に亂れヘンリーの子フレデリック再び勢力を得たり而して此争は實に奇異なる争にして法王黨の首領たるハットは法王の敵となり皇帝黨の諸侯は却て法王の味方となりしがミランの市府の如きは猶ほハットに附屬しパピヤ等の諸市府と盛に勝敗を争ひたり然れど其結局は終にハットの敗に歸し千二百十四年佛蘭西王ヒリップ

チーガスタスの來て法王を助くるに及びフートーは全く其勢を失ひたり
 ナトー第四世千二百十八年を以て崩しフレデリック二世終に皇帝となれり帝
 は幼にしてシ、リ、に人となりサラセン風の教育を受け當時の君主中の學者な
 るか故に其政治も從て善良にして初年の間のセルマン伊太利も平安に西羅馬皇
 帝の權力を奉戴せしかば皇帝はチーブルスの大學を起しボログナーサラマナ
 の大學を盛にし今日の所謂伊太利語を開きしか幾もなく法王グレゴリー第九世
 と十字軍に臨まさるの故を以て争を起し法王の爲にロンバード同盟市府を奪ひ
 去られて甚だ困難なる位置に墜ち千二百三十年サンセルマノの條約を以て其
 争は終局一法王と力を合せて羅馬舊教の反對論者を壓伏したり此宗徒は當時「パ
 テライニス」と稱せられたる者にして殊にミランニ於て多く殺戮されたり
 是より先「フラン」人は兼てフレデリックの所爲を對して不平を抱き居りしか千二
 百三十四年フレデリックの長子ヘンリーが父に對して起したる叛亂を援けて十
 分にフレデリックの勢力を敗らんとしたり但し其亂はグレゴリーが之を助けざ
 りしを以て忽ち平定したるが皇帝は勝利を得たるの勢に乗し「モクレリノ」ド、ロマ

ノーと共にロンバードの同盟市府を攻撃し引續きて以太利に於ける法王黨の勢
 力を殺さしかば「ヴェニス」セノアの兩市府は法王を援けて皇帝黨を反對して大に
 「セルマン」皇立の勢力を傾けたり「グレゴリー」崩して「インノセント」第四世法王とな
 るに及び皇帝の勢力益々宜しからず法王は最も皇帝と相惡みたる人なれば直に
 之を宗外に放逐し一方にはフレデリックに對して不平を抱ける軍卒に嗾して數々
 暗殺を試みしめしが故に其事成らざりしむも拘はらず皇帝は頻に疑懼を懷き千
 二百四十七年「バルマ」府の叛きて不意に其軍を敗るに及び皇帝は益々驚き千二百
 五十年終に幽鬱の間に崩したり皇帝は獨り「レ、リ」のみならず「セルマン」及び「伊
 太利」のために大に盡さんとするの志ありしに或は法王のため苦められ或は我
 黨の爲に困められ遂に其終を全くせんと能はざりしは惜むへし
 「フレデリック」等二世の崩後伊太利は種々なる王位候補者の競争地となり互に勝
 敗ありて容易に決せず其間「ピサー」「フロレンス」「セノア」「ヴェニス」「ミラン」等の自由市
 府は益々其勢力を振ひ或は法王黨に與し或は皇帝黨に與して數々激戦をなせし
 か千二百八十四年「ピサー」は「セノア」のために大敗を取り爾來再び伊太利の地に勢

力を張る能はざるに至りしかばタスカニー地方に於て最も勢力ある市府はフロレンスのみとなり左れど此市府も古の如く自由民の共和政府にあらざして貴族政体の支配に服するものとなりたり而してヴェニスは元來野蠻人の侵入を避けて伊太利北部の海島中に逃れたる自由民が設立せる市府なりしが漸々に其勢力を得之を支配する官吏を「ドッシ」と名け貴族の相會して設立せる「グレートカウシ」と相結ひて「ヴェニス」全市府の政務を主りたり然るに此組織は下民の甚た喜はざる所なりしかば千三百十年頃より人民は特に住民の會議員を選舉し「ドッシ」と共に行政權を掌らしむると爲したりセノアも亦「ヴェニス」同様なる市府なりしが「ピサー」を敗て以來大に勢力を占め十字軍が亞細亞に出發せる際には「ヴェニス」と共に船を出して之を「パレストアイン」に送り歸路亞細亞の貿易品を求め來りて之を歐羅巴の市に賣るとを務め「ヴェニス」と「レバント」の商權を争ふに至れり此の如き有様みて伊太利は一方には王冠の競争絶えず他の一方には市府の勢力益々盛なるの有様なりしが千三百〇八年ルキセンバーク公「ヘンリー」セルマン王となり全一十年に伊太利に來りて帝冠を受くるととなり之を「フレデリック」第

二世以後に於ける第一の皇帝となす元來皇帝が伊太利に來るとは法王の喜はざる所なりしが「ヘンリー」第三世のみは却て法王の喜ふ所とありと云ふ而して其の法王の爲に喜はれたる所以は當時佛王「フィリップ」第四世が法王「クレメント」第五世に對し非常の勢力を振ひたるを以て法王は「ヘンリー」の力を假りて佛王の束縛を脱せんと欲したるに由れり殊に此事は獨り法王のみならず伊太利に於ける皇帝黨の最も喜ひたる所なりしか故に「ヘンリー」の伊太利に入るや皇帝黨は恰も大早に雲霓を得たるが如く何れも佛王の勢力を轉覆すへき時期至れりとなし争ひ來りて其旗下に投し「ミラン」の市府の如きも大に皇帝の援助をなし伊太利王國の鐵冠を「ヘンリー」に捧ぐるに至りしか後幾もなく皇帝が府民に向て金錢を要求するの多きを厭ひて叛き去れり但し「ミラン」等の市府に於て皇帝が不入望になりしは却て「ミラン」「フロレンス」等の敵手たる「ピサー」等の市府に於て人望を得るの原因となり皇帝は尙ほ伊太利の地方に勢力を保つとを得たりしが紀元千三百十三年「ヴェナ」征討の際病に罹て崩したり

然れど皇帝黨が伊太利に勢力を占め「ヘンリー」が之を率ゐて反對黨を征伐したる

とは法王黨をしてチープルスのロバートを主領と仰がしむるの原因となり之が爲に伊太利内部の争亂ハ未だ其跡を絶つと能はずヘンリー崩御の後伊太利は再び數多の候補者の競争地となり第十四世紀以後ハロンバードの市府すらも數多の小諸侯が割據の土地となりたり然るに此際セルマンの選侯はバマリア侯ルイスをセルマン皇帝に選舉せしに一方にはライストリヤのフレデリックを擧ぐるものありてセルマン國內も亦王位の競争のために分裂せしかば法王ジョンはバマリア侯ルイスを倒してライストリヤのフレデリックを皇帝となし因て以て伊太利内部の反對黨を壓伏し大に法王の勢力を高めんとせしが千三百二十二年フレデリック遂に敗亡しバマリア侯ルイス帝位に即き伊太利の皇帝黨は之が爲に再び勢力を占め法王黨の勢力は却て大に衰へたり然れど千三百二十九年に至リルイスは伊太利を去り皇帝黨の有力者たるカンダラ、スカラも亦同時に病没せしかば法王黨も漸く其勢力を恢復し皇帝黨は却て其勢力を失はんとせり而して其際ホヘミア公ジョンヘンリー第七世の皇子と云ふを以て大にセルマン人の望を得伊太利に入りてロンバード市府の歡迎する所となり將に皇

帝黨の勢力を挽回せんとせしか黨中の小諸侯はジョンのために其勢力を奪はれんとを恐れ却て法王黨の味方をなしフロレンス府民及びチープルスのロバート王と同盟して烈しく之に抵抗せしかば千三百三十三年に至リジョン終つ十分の奏功なくして其本國に歸れり左れど法王黨の首領たるチープルスのロバートは早や老衰して十分に法王黨の運動を指揮すると能はざりしが故に皇帝黨たる諸侯は却て伊太利に勢力を得たるの有様なりき而して千三百四十三年チープルス王ロバート崩したる時には王の女にしてハンガリー王アンドリウの後たるジョン其後を襲ぎ再び法王黨の勢力を復せんとするの勢ありしかアンドリウが其後の領地たるの故を以て大にネーブルスノ政務に關係しハンガリー國民をしてネーブルスの政權を奪はしめんとしたる由リジョンアナの従弟チャーレスはジョンアナも反對して兵を起し遂にネーブルスを奪ひたるのみならずハンガリース王アンドリウの弟ルイスも亦兵を起してネーブルスを襲ひしかばネーブルスハ是より競争の衝となり全く法王黨の主位に立つべき位置を失へり

以上述べたる所の要を摘みて之を言へば外國人の伊太利に侵入したるハ佛蘭西

のヤレス第八世が伊太利に侵入したるの故を以てロドピコがミランの「ヂューン」
とありたるを見他の伊太利諸侯が外國王の力を借りて其勢力を高むるの手段と
なしたるに本々末遂に伊太利ヲ以テ外國人ノ戰場となしたるなり但し法王は常
に其勝利の外國人の手に落ちんを恐れ或は彼を黨し或は此に與みし互に對敵
の姿を有たしめたるを以て伊太利は全く外國人の手裡に落るの慘狀を免るゝを
得たり夫の法王ジュリアス二世が法王の權力を高むるゝに盡力し一旦は外國
の諸王と結ひて伊太利國內に勢力を占めんとするのヴェニスを殲しヴェニス
が全く其勢力を失はんとするに及ひては更にカンブレーの同盟を脱してヴェニス
を援け由て外國と外國とを戦はしめ徐に其後を制したるが如き以て法王の政略
を見るべきなり

然りと雖ども伊太利は之が爲に終に外國諸王の手裡に落つるゝを免れず紀元千
五十三年法王レヲ第十世の時に至りては伊太利國內に獨立の体面を有するもの
は獨り法王とヴェニスの共和政府のみとなりたり然れば中世紀の末路に於ける
伊太利は之を名けて歐洲諸國分領の土地と稱するも不可なるなきの狀体となり

爾來近世に至りてサルテニア王の之を一統するまでハ真正の伊太利國を見ると
能はざるに至れり

日耳曼

ゼルマニーも亦シャイレマン皇帝の所領の一部となりたるものなり此國元來の
組立を見るに人民は貴族と自由民とに分れ貴族は最上の權力を握りたれども人
民も亦多少の勢力を維持し孰れも奴隸と云ふ者を以て其勢力を維持するの機械
となしたり而して其自由民は「ヴァイルレーヂス」或は「バンドレッツ」と稱する町村或
は町村の團結を造り其主領を選みて其町村内の事務を主らしめ一國毎に王若く
は之に似たる長官を選擧ぐ之をして各町村の首領を統御せしめ人民は別に人民
會議なるものを設けて是等長官の勢力を制限し長官の命する所と雖も人民會議
に於て之を認可せざる様の事もありて頗る自由制度の發達したる國なり後に後
には各團體の王ども云ふへき「ヂューク」「カウント」の類が非常の勢力を占め幾分か
人民の權力を殺きたるのみならず國家全体は封建割據の有様なるか故に是等「ヂ
ューク」「カウント」の間に争絶せず人民は頗る困難の生活をなしたり然も彼等は頗

然として一主の下に服するを欲せず、チャーレマン皇帝に對しても容易に服従の意を表せざりき。

已にしてチャーレマン皇帝の之を征服するや盡く「ヂューク」を廢し其代りに「マルグレープス」を邊境の地お置き之に任せるに外國人の侵入を禦くの事を以てせり。此「マルグレープ」の主たる者ハ「カリンシヤ」の「マルグレープ」にして「アドリヤチツク」海より「ダニューブ」に至るの地を領せしが「バマリヤ」國防禦の爲めに立てたる「ストリア」の「マルグレープ」も後「セルマニー」に於ける必要なる諸侯となれり而して「チャーレマン」は此等の諸侯を以て年々其政績を報告せしめ別に貴族會議と平民會議とを設けて政務を諮詢し且つ僧侶に授くるに高等なる地位を以てし以て「セルマン」を統御せし。此法も皇帝の生存せる間は十分に其功を奏したれど帝崩して後は「カロピンシヤ」帝室の力衰へ十分に之を制すること能はざるか故に「セルマン」は到頭強大なる諸侯の割據地となり皇帝の命令更み行はれざりき。右末段に述べたる所は「チャーレマン」皇帝以後に於ける「セルマン」國の形勢なるか其間「セルマン」王室の變遷は如何様なりしやと云ふに帝の子「ルーイゼハイアス」は

自ら「チャーレマン」皇帝の後を繼ぐべき才なきを知り紀元八百十七年に帝國を分て其三子「ロザーベピンルーイス」に授け特に「ロザー」をして帝位を有たしめしが後幾もなく第四子「チャーレス」を得に及び先に三子に分ちたる所の一部を割きて之を封せんとせり是に於てか先の三子の共に「ルーイス」に叛きしが長子「ロザー」は遂に其父を幽閉するに至れり尤も其後「ルーイス」は再び帝位に復するを得しが紀元八百三十八年第二子「ベピンの」死するに及び其地を分て「ロザー」に「チャーレス」に與へり「ルーイス」には一部の地をも分與せざりしが故に「ルーイス」は之を怒りて父に叛き「チャーレマン」帝國は爲に再び紛亂お歸せり。

斯くて「ルーイス」は紀元八百四十年病を得て崩し長子「ロザー」獨り帝權を有するとなりしが二弟「ルーイス」は更に之に服せず紀元八百四十一年終ニ「フオンテノ井」の戰を起して「ロザー」を破り全四十二年有名なる「ヴェルダン」の條約を締結するに至れり而して此條約は伊太利史に於て已ふ述べたる如く「ロザー」に伊太利と佛蘭西日耳曼の境界なる狭少の土地と帝冠とを與へ此地方より西は之を「チャーレス」に與へ此より東即ち「セルマン」の之を「ルーイス」に與へたり是れ實にセ

ルマンが一獨立王國を作りたる初なり

ルイ、ゼ、セルマンの條約に因てセルマン國即ち東フランク王國を得たれど初より靜穩に其地を領するを能はざりき如何とせれば當時スカンデナヴィヤ人と稱する者ありシヤールマン帝在世の間は容易に是をセルマン地方お容れざりしが帝崩御の後は屢輕舟を飛ひして諸方の川を溯り深く内地に侵入して劫略を極めたるのみならずスレーブ人は其東北を犯し而して西フランク王チャーレスも亦た窃にセルマンを窺ひたればなり

ルイ、ゼ、セルマン紀元八百六十七年を以て崩じ其子チャーレス、ゼ、ファット繼ぐ王は紀元八百八十四年に至り其内部の紛擾に乗し西フランク王國をも並有したるか故に往昔シヤールマンが領したる土地と殆ど相等しき程の大國を有し其勢甚だ盛なりしも尙ノルスメン即ちスカンデナヴィヤ人の攻撃を禦くと能はず終には國民の不人望を買ひ紀元八百八十七年に至りて其位を廢せられ東西のフランク王國は復分れて二となれり

チャーレスに繼てセルマンに王たりしはアルナルフにして紀元八百九十一年大

「ノルスメン」をルーウエンニ敗り同しく八百九十四年伊太利に往きて羅馬皇帝となりセルマン國に於ては隆盛なる勢力を有せしも八百九十九年皇帝崩して其子ルイイス、ゼ、チャイルド位を繼ぐに及びハンガリヤ人頗にセルマンの内地に侵入して一日も之に安寧を與へざりき王は紀元九百十年を以て崩したり

已に陳へたるが如くシヤールマン大皇帝は古代の諸侯を廢して其代に「マルグレイブ」を置き以て一地方の武權を支配せしめしがシヤールマン皇帝崩して後は内部の争亂甚しく「カロピンジャン」王統の勢力弱くして各地方に諸侯を封建するに非されは到底セルマニを治むると能はざるの姿なりしかば再び諸方に「ゲノーク」即ち諸侯を建るととなりたり勿論是等の諸侯は王室に臣たるの義務を有するものにしてシヤールマン以前に於ける割據の諸侯とは幾分か其性質を異あせるものなりと雖も元來是等の輩は皆其部下に數多の小諸侯を有するのみならずシヤールマン皇帝以後有力なる自由民は寧ろ諸侯の部下に屬するの却て王室に直轄せらるゝに勝るを知り租稅其他の點に於て其身を利せんと欲し多く諸侯お服従せしかば諸侯の勢力意外に強く王室直隸の人民と自治の市府とは其數大に減し

其專横なるを前後比なきに至れり

此の如き事情なればセルマン王は之を人民の王と謂はんよりも寧ろ貴族の長と稱するを可とすの有様となり其權力日々に衰へて諸侯伯の争亂をも鎮め得ざるの形勢となりしが當時國王の租税は僅にラインに沿ひたる直隸の地及び金銀鑄造の利海關稅等より收得するものに止まりたりと云ふ而して王の權力すら已に此の如きの有様なれば人民の權力の如きも勿論甚だ弱くして古代より開かれたるセルマン國會即ちダイエツトも普通は貴族のみの國會となりたり是れ實に「カロビンジャン」王統の末路に於けるセルマンの形勢なりとぞ

「カロビンジャン」王統の斷絶するやセルマン國內の主位に立てる諸侯は熟識の上フランコニヤ侯コンラッドを王とせり是れ即ちコンラッド第一世にして此王の即位以後セルマンは全く選舉王國と變し選舉諸侯の一致を得るに非されは王の子と雖も敢て其位を繼ぐと能はさるととなりたり然ればコンラッドは頗る王室の權力を強めて容易に諸侯を支配し因て以てセルマンの平和を維持するに熱心なりしか不幸にも當時のサキツニー公ヘンリート云へる人に妨げられて其志を

遂くると能はず紀元九百十八年を以て崩したり但し王は元來國家を思ふと切なる人なりしか故にサキツニー公ヘンリーは我目的を妨けたる敵手なるにも關せず此人にあらされは諸侯の權力の盛るセルマン帝國を支配すべき人なきを認定し死するに先ちて選舉諸侯に忠告しヘンリーを迎へて位に即かしめたり之をヘンリー第一世と稱しセルマンに於けるサキツン王統の祖先とす

ヘンリー第一世はコンラッドの豫期の如く果して甚だ有力なる王にして先づセルマン國內に於ける反對の諸侯を征服し紀元九百三十三年を以て大にハンガリー人をメルスバークに敗り以てセルマンの國界を平穩にせり是れセルマン國人が王を尊ひて「フアーザー、オフ、フアーザーランド」と稱したる所以なり西フランス王國の争亂に乗してロザリオンシアを奪ひスレーブ人を敗りホヘミヤ公を服従せしめ北の方デンマルク人を打敗りてアイダルの地方を奪ひたるも亦此王なり此の如き君主なりしを以てヘンリー第一世は頗るセルマンに勢力を得因て以て大にセルマン國の兵勢を改め騎馬の軍隊ヲ増加して、ボンガリー人に備へ諸方に常備兵ある自由市府を設立して各自に外敵を防ぎ得る様になせしが此等の市府

は後漸く勢力を占め數多の自由民來りて之に投せし以來獨りセルマン地方の商業を盛ならしめたるのみならず大に王室を助けて諸侯の專横を抑ふるの機械となりたり

ヘンリーハ伊太利に行きて帝冠を求むるの思想ありしか國內多事にして之に及ぶに暇わらず終に其意を果すと能はさりき帝紀元九百三十五年を以て崩すセルマンの大諸侯深く帝の良政を喜び其酬報として其子を撰擧す之をナトー一世となす

ナトー一世即位の模様は是れ實に充分ヘンリー一世がセルマン王室の權力を強めたるを證し得るものにして其際有名ある大諸侯は皆即位式の供役に服し以て王室尊崇の意を表明したりロザリンチア公が宮内大臣として務に服したるか如きソアピア公が酒盃を捧げたるが如きバリーリヤ公が帝の御馬を馭したるか如き是なり然れどナトーが尙壯年なりしを以て彼等も其後は幾分か之を輕侮するの念慮を生じ或はナトーの庶弟サンクマルを勸めて反を謀らしめたるをあり或は實弟ヘンリーを勸めて亂を起さしめたるをあり國內一時は非常の亂を生

ぜしかナトーは開ゆる豪傑なれば悉く此等の反亂者を亡ぼし數多諸侯の地を收めて其親族に分領せしめ以て益々サクソン王統の勢力を高め内部の事漸く平くに及びて終に伊太利を進撃し時の伊太利王ベレンガルを平げ紀元九百六十二年二月を以て西ローマ皇帝の位に即きたり

伊太利とセルマンとが合して「ホリー、ローマン、エンパイア」となりたるを一方より見るときはセルマン王國に好影響を與へたり此時までは「チャーレマン」皇帝以來一王がセルマン國の主長たりしにも拘はらずセルマン諸地方の人民の決してセルマン國民としての團結力なく「フランク人」「サクソン人」「スワビヤ人」等各自に同族内の團結を堅くし以て互に競争を爲したりしが是より以來是等のセルマン種國は皆羅馬帝國民となりたるを喜び是迄の敵意を放却してセルマン國民たるの感情を發揮しセルマン王國をして真正のセルマン王國とならしめセルマン國民をして真正のセルマン國民とならしめたり

然りと雖も又一方よりして之を觀察するときにはセルマンが伊太利と合して「ウェスト、ローマン、エンパイア」を作りたるはセルマン國に非常なる損害を與へたるも

のと云はざるべからず如何とされは爾來セルマン皇帝はセルマン國外の戰爭に従事せざるべからざるの狀体となり非常なる財産と人命とを失ひてセルマン固有の勢力を減少したるのみならず之が爲に大に皇帝が諸侯に對するの勢力を失ひたればなり

是より先チャーレマン皇帝セルマンに「パルスグレイプ」と云ふ職を設け國王直轄の土地と租税とを支配し時として帝に代りて訴訟を裁斷せしむ而してオートも亦此制に従へり然るに此職は一方より見れば或は王室の爲に諸侯の權力を抑ふる機械となりたれど又往々王室の土地を私占して獨立の諸侯となり以て王室に反對したり是も亦此時代に於けるセルマンの不幸なりき

チャトー第一世崩してチャトー第二世繼ぎ之ヲチャトー第三世も譲る母をセオフハノと云ひ頗る英邁の婦人にして能く天下を御しセルマン國內稍平和なるを得たり是に由てチャトーの長するやセルマン王の勢力は案外に強かりしのみならず王は學問文章當時に秀て頗る市民の間に人望ありしが故に後遂に諸國を滅して古代の「ローマンエンパイヤ」を再建せんとするの計畫を爲すに至れり然れど此目的

は王の早世したるが爲に其實行を見るに能はざりき

チャトー第三世崩してヘンリー第二世繼ぐ帝の時迄はセルマン王は以太利に行きて法王の許可を得るに非ればローマ皇帝と稱するに能はざりしが帝は深く之を不便とし假令皇帝とならざるも伊太利を屬國として有するの便法を立てんと欲し帝とならざる以前には「キングド・オブ・ゼ・ローマンス」の名稱を取りてセルマンイタリーの兩國を統御せるととなしたり是れ實に紀元第十一世紀の初半あして是よりセルマンと伊太利との關係は益密着となりたれどもセルマン國內にの前にも述べたる如く諸侯各其權力を振ひ加ふるに「ノインツ・コルントライエ」ルブレノン「マグデボルグ」サルツバルグ等の僧正領「アーチビショップ」リツクス各其勢力を逞くヘンリー第一世が立てたる自治の市府も漸々強大となり一方に於ては諸侯に反對するの勢力となりたれども一方に於ては王室に反對するとありしが故にセルマン内部は尙充分に平和なるの形勢なかりき

ヘンリー第二世崩してセルマンの選侯「コンラッド」と云ふ「フランコニヤ」公を王となす是を「コンラッド」第二世とあす王は頗る賢明なる人にして訴訟を明ふし奪掠

を禁し併せて諸侯の勢力を削り後伊太利に入りてローマ皇帝となるに及び紀元千〇三十七年を以て有名なる布達を出たし大小諸侯の領土は盡く世襲たるべきの定制となし因て以て諸侯の分奪を拒き大に小諸侯を保護したり而して其目的ハ畢竟小諸侯を以て王室に臣服せしめ以て大諸侯の勢力を削り因て國家の争亂を防壓せんが爲ありしと云ふ而して此制は始め伊太利のロンバード地方にのみ行われしが後には伊太利全國及びセルマンの國內にも行はれ大に國家の益を爲したり

コンラッド二世崩してヘンリー三世繼ぐ王はコンラッドにも優りたる程の豪傑にして數多御し難きの諸侯を服従せしめ紀元千〇四十三年に至りてセルマン全國に平和の布令を出たすとを得たるのみならず後皇帝となるに及んで大ホ耶蘇致の弊害を改良し法王を以て我家の立る所となし因て大に其權力を削りたり天若し此人に假すに十年の壽を以てせば法王の勢力は全く皇帝の附屬物となると蓋し疑なかりしならん不幸にして早世し其志を達するを能はざりしは皇帝の爲に惜むべきの至と云ふべし



欠

MISSING

此
洞
脱
丁

在りし夥しき奴隷の此に従事せるの故を以て自由民となりたる者多く而して彼等は再び奴隷の地位に陥るを恐れて是等數多の市府に投じ大に其勢力を助けしかば市府は益々勢を得て諸侯に反對し却て諸侯よりも勢力ある有様となりセル

マシ全國は市府と諸侯との間に分割せらるゝものとなりたり是れ其後諸侯が多く奴隷に自由民たるを許し以て其歡心を得んとしたる所以なり而して人民の權力が此の如き有様となりて復之を制するに諸侯の我意を以てするを能はざるは勿論の事なればセル

マシ國內にも漸々法律の制定せらるゝ状態となりしが此時代に行はれたるは羅馬律を第一としたり

然れど諸侯の權力は前段に述べたる如く王室に對する者として猶ほ頗る盛にして王室の命を奉ずるもの少くコシラツド第四世崩して後は國內の混亂殊に甚たしく唯私闘を事として王をも立てざるの姿なりしが時を経るに従ひて諸侯も漸く疲れを感じ加ふるにローマ法王がセルマン國內の戰の我財政に關係を及ぼすも少ながらざるを愛ひて頻に王を立てるの必用を説くに逢ひ其混亂稍定まりしかば紀元千三百七十二年に至りてハツプスブルグ家のルドルフと云ふもの終に

史

七十一

セルマン王に選舉されたり但しルドルフの即位も就きてはルマン王チットカ
大に之に反對し爲めに二三の劇戦もありしか千二百七十八年サーチフィルトの
戦にチットカー敗死したるを以て其事も漸く治まりルドルフ終に王位を踐むと
を得たり

ルドルフはセルマン賢王の一人にして當時大に滅殺せられ居たるセルマン王室
の領土を恢復し裁判法警察法等を改良し私闘と掠奪とを禁し數多盜賊を業とせ
るの貴族を誅滅し以てセルマン國內の平和を維持したりしか惜むへし天之に年
を假さず未だ十分なる成功なくして崩したり

ルドルフの崩するや諸侯ハツプスバーガ家の獨り盛ならんとを恐れて其子を
立てずチットカ公アドルフを立てて王となす王は其志なきにあらざりしも力少
なくして國家の平和を維持するを能はざりき王廢せらるゝに及びてルドルフの
子アルバルト第一世遂に位に即けり是に於てか王位は再びチーストリヤ家の所
有に歸し都も之をチイヤナに置くこととなりしかアルバルトは其父に似ず嗜私欲
にのみ是れ耽りきチーストリヤ家を盛にするの政略のみを取らしかば大に諸侯

の歡心を失ひ其死するに及びて職を其子に傳ふるを得ざりしが故にルマン
バーク公ヘンリー第七世セルマン王の位も登れり

ヘンリー第七世の時代の事記すべきなき其崩するに及びて選舉諸侯分れて二
となり一はバリア公ルイスを推し一はチーストリヤ公フレリッソを推す
是に於てかセルマン國內の争亂再び起り凡そ十年間の戦争となりしが其結局ル
イス第四世遂に勝利を占めたり然れど王は其後幾もなくローマ法王ジョン第
二十二世と権力の争を起し國內再び亂れんとせしが幸にも此時代に於ける法王
の勢力は大にグレゴリー第七世の時代に異なりてセルマン諸侯の中にも法王か
其國事に干渉して屢争亂の媒を爲せるを怒る者多かりしかはルイスは其等の
助を得て選舉諸侯の同盟を結約し爾來ローマ皇帝並にキングプロマンズの
稱號は選舉諸侯より之を受くるとどなし全く之れを法王に關係なき者と明言す
るを得たり若しルイスが此時に乗じて王室の勢力を高むるとに盡力せしならば
セルマン王室は永く諸侯の勢力を壓へ得るものとなりしならんルイスは其
策此に出つるを能はず唯我家を富ますとのみ務めしかば諸侯悉く之を怒り王の

崩ずるに及んで敢て其子の立つとを許さずムラビヤ公チャールスを立て、王位に即かしむるに至れり是をチャールス第四世と稱すセルマン王が王位に登りたる後も其身が從來領したる土地を有ち之に加ふるにセルマン王位に附屬せる土地を以てするとの制と王室附屬の土地を奪ひて出來得るだけ我家の世襲財産にするを務むるの弊風とは實フルーイスか之を始めたるものなりと云ふ

チャールス第四世も亦セルマンの爲めに盡力せずして主に自己の爲めに務め甚しきハ王室所有の土地を賣りて我家の財産を増加するの策を施したるを以て却て大に諸侯の勢力を高め紀元千三百五十六年有名なる「ゴールデンブル」と云ふ詔勅を出たし是迄隠然七人と限られたる選舉諸侯に與ふるに公然七人に限るべき權利を以てせざるを得ざるに至れり是を選舉諸侯の地位が十分に確定したるの初となす然れどチャールスガ我家の利益を増さんが爲なりとは云へホヘミヤの市府「ブレイグ」に大學を設立してセルマン全國に學問上の利益を與へたるは是れ決して輕々に看過せへからざるの功績と云はざるべからず

此時に當りてセルマン國內に最大の勢力ありたる國は「ノーストリア」ありしにせ

セルマンの選舉諸侯は「ノーストリア」家の勢力が日々に強大なるを惡みて其家より王を撰むとを欲せず力めて他の家より選舉せしかばセルマン國王の勢力愈よ振はず諸侯益す制し難かりしに皇帝は當時勢力ある「スウィツ」ハ「ルランド」ハ其他自治の同盟を結ひたる市府と聯合して之に當るの策をも用おずウヘンセスロース皇帝と云ひ「シジスマンド」皇帝と云ひ唯私闘に従事して國力を疲らし王室の勢力を縮めたるのみならず當時「耶蘇教」部内の腐敗は漸く之に反對する所の宗派を出たさんとするの景勢を顯はし英國に出でたる「耶蘇教」の反對者「ワイクリフ」の黨人「ジョン」ハスと云ふホヘミヤ人大に「耶蘇宗」の腐敗を攻撃して別に一宗教を立てんと企て紀元千四百十六年遂にセルマン皇帝の爲に焚殺せらるゝに至り之が爲に「ホヘミヤ」地方の人民舉りて皇帝に叛きしかばセルマン國內益々大亂の有様となりたり

「シマスマンド」皇帝崩して「アルバート」第二世「ノーストリア」家より入りて其後を承く王は元來「ホヘミヤ」王と「ハンガリー」王とを兼ねたる人にして其勢力強大なりしか故に亂れたるセルマン國に取りては尤も適當なるものとして選舉されたり是

れ爾來オーストリア家のみ王位を踐むの初なり而して王はセルマン全國の豫期の如く當時セルマン國內の事に干涉せるローマ法王に對しても十分なる勢力を張り國家の繁榮得て期すへきの姿なりしか永く位に在らそして崩ぜしかばオーストリア家の一枝族たるフレデリック三世繼て王位に登れり然れど此王の元來家貧にして事業を舉ぐるに足らざりしのみならず活潑なる思想に乏しき人物なりしかば國內の靜安を保つこと能はず諸侯は常に爭亂を起して國家全体の事を思はず而して土耳其人機に乗じて數セルマンを侵せり幸にハンガリー人の勇悍に之を拒ぎたるを以て地を失ふには至らざりしも國家の亂は益甚しくなれりフレデリック三世紀元千四百九十三年を以て崩しマキシミアン第一世代で位に即く王はフレデリック三世が在位五十三年ノ間國家の平安を維持すること能はざりしその後を承け事を好むの性質を備へ然も充分の力を有せしかば之が爲にセルマン國內外の戰爭は殆ど絶ゆるの間なき姿なりき帝即位の後第一に起りたる重要な事件はフランス王チャールス第八世との間に起りたる交渉是なりチャールス第八世は伊太利史に於て述べたるが如く大軍を以て伊太利に侵入し

大に其勢力を振ひしかばマキシミアンは之を壓せんと望みしが國家の助を借らずして到底チャールスの如き勁敵に當ること能はざるを知り千四百九十五年有名なるウラームスの大會議を招集してチャールスを伐つべき援助を與へんことを求めたり是に於てか其招集せられたる人々は此議會に乗して大にセルマン國內の事を整理せんと欲し第一私闘を止むるの約をなし第二にマキシミアンに迫りてインペリアルチャンパーと稱する裁判所を設けしめたり此裁判所の諸侯の約束に背きたる者を裁判せんか爲め之を建てたる者にして之に奉職する裁判長と陪審官とい何れも王に對して獨立の職權を有し其裁判長と陪審官との中裁判長は王の任命に因りて職に就き陪審官は悉皆諸州より之を選擧する者なりき然れば此裁判所はセルマン王國に取りては甚た必要なるものにして王室も諸侯も之か爲めに幾分か私利を去りて正路に赴くととなりたるをなるがマキシミアン皇帝の我身の爲にも甚だ不利なるを思ひて其設立を拒み數は迫まられて漸く之を準許したりと云ふ尤も此裁判所も時には權力を失ひ充分の功用なきとありしと云へりマキシミアンの時代に起りたる第二の重要な事件は

ウイット、ルランドの實際に獨立したるを是れなり此事はマキシヨリアン第一世がスウイットルランド人のチャーレス第八世を助けて伊太利の征服を企てたる罪を罰せんがため紀元千四百九十九年兵を率ゐてスウイット、ルランドを征伐したるも原因したる者なるが王は諸侯の助を得ると能はざりしが爲に志を遂ぐるを能はず終にスウイットルランド人の租税を免除して和を講じたり但し其後一世紀半の間はスウイットルランドは表面上尙ほセルマンに附屬したりと云ふマキシヨリアンの時代に起りたる第三の重要な事件はセルマン全國を十國に分ちて支配したるを是なり此國に分ちて之を支配するとは先王アルバート第二世が己を企てたる者にて當時帝が諸侯の制し難く私闘の已みがたくしてセルマンの勢力日に衰ふるを憂ひて計畫したる一策なりしかアルバート第二世は終に之を遂くると能はずして崩したり然るにマキシヨリアン皇帝事を好むの性質も時には其功用を見はずとありてアルバートの意思か行はれざりしを惜みウヲームスの會議以來諸侯の私闘が大に減したるに乘し紀元千五百〇一年セルマン全國をパマリラスロピアフロンコニヤ上ラインウエストラーリア下サキソニーチ

ーストリアバルガンデー下ライン上サキソニーの十國に分ち各國に一の中央政府を設立し其政府は「インベリアル、チャンパー」裁判所の判決を實行する權利を授け國中の大小諸侯を檢束せしめたりマキシヨリアン第一世第四の事業は「チーリック、カロンシル」と稱する裁判所の設立是なり此裁判所はマキシヨリアンが其身の世襲財産たる領地を整理して之に住居する臣民の歡心を結ばんが爲に設けたる控訴院にして初は唯マキシヨリアンの領地内のみ其權力を有せしか後には他の各州の人民も盡く此裁判所に向て裁判不服の控訴を提出するとなりたり其他マキシヨリアンは數多の事業に志させしか其等の事業は千五百十九年皇帝の崩御によりて後マキシヨリアンはローマ皇帝となれり遂に成立たざりき目を轉じてマキシヨリアン崩御の頃に於けるセルマン王の位置と觀察するに猶ほ黯淡たる景況を呈し獨り權力の微弱なりしのみならず王室に附屬すべき租税の如きは其額甚た少く諸侯並に市府の類は之に對して殆ど獨立全權の体面を爲したり然も此際に於て王室が猶ほ多少の權力を有せし者は是れ全く王位に登りし人か大抵は數多の世襲財産を保有し一諸侯としても最も有力なる位置に立ち

たるに由る者なり而して諸侯も王室に對しては右の如く獨立の狀体を爲し權力極めて強大なりしが如くなれど其實セルマン國が十國に分たれし以來彼等は國の政府に支配されると者となりたるを以て古代の如く我儘なる所置をなすと能はず其勢案外に微弱なりき

王と諸侯とは斯く權力なかりしか自由市府は之に反して非常なる勢力を有し最も富みたる一團體を爲し概ね民主的共和政治を以て其市府を支配したり是に於てか前代に國會と稱したるは單に貴族の會合にして之を貴族會と稱するも不可なるとなきの姿なりしか此頃に於ては自由市府の代表者意外に其勢力を振ひ今日の所謂國會と幾んど其性質を全じくするに至れり而して是れセルマン國が古代の如く唯王及び諸侯の意思に制御せられずして全く法律の支配を受るものとなりたる所以なり當時最もセルマン國に行はれたる法律はローマ律なりき

史 學 (古代史)

農學士 志賀重昂

歴史とは人間の關係せし過去事件の記録なり

歴史の重要な點は人間の開化の原因結果及び其發達進歩に關する事々を力めて明確に觀察するにあり

歴史の主眼は古往今來の人文に影響を及ぼしたる一國民が行爲を研究し且つ甲國民と乙國民との間に關係せる事々を研窮するにあり

人文の發達に五種の現象あり一智力的二經濟的三美術的
四宗教的
五政治的是れなり

歴史を研窮せんには地理學社會學經濟學人類學古物學原語學博物學に關する多少の智識を具へざるべからず英雄豪傑は固より簡人と雖も其行爲大に人文に影響を及ぼすものなり故に是れ亦英雄豪傑の言行録も多少知悉せざるべからず
歴史以前の時代は人類學古物學原語學に據りて取調ぶるを要し予は唯所謂歴史

以後の歴史を講究すべし
人文の歴史上下五千年浩渺の殊に甚しきを以て歴史家便宜の爲め是れと古代史
と中世史近世史とに別つ

古代史は太古より西歴四百七十六年西羅馬帝國滅亡の際に到るの記録なり
中世史は西羅馬帝國滅亡の際より西歴千四百五十三年東羅馬帝國滅亡の際に到
る間の記録なり

近世史は東羅馬帝國滅亡の際より今日に到る間の記録なり
斯くの如く古代史中世史近世史と區別すれども歴史は固より箇人の行爲の綜合
したるものと記録なれば箇人の行爲の猶ほ何時より英雄となりしや何時より社
會に容れられざりしやと其區劃すべき時期の分明ならざるが如く歴史とて何時
まで古代史なりや何時より古代史なりや何時より中世史なるや何時より近世史
となるや其區劃すべき時期は誠に分明ならざれども唯々便宜の爲めに以上の如
く三史に區劃せしものなり然れば予は先づ所謂古代史より予の講義を始むべし

古代史

古代に於て國民的の發達をなしたるものは東方に於ては支那日本西方に於ては
エジプト(Egypt)アッシリア(Assyria)バビロニア(Babylonia)ユダヤ(Judae)フェニ
シア(India)波斯等とす

支那日本の歴史は諸士が業既に諳熟する處なれば予はエジプトの歴史より講究
すべし

エジプト(Egypt)

エジプトは政府及び諸制度の建設最も舊き國なり

エジプトの歴史はナイル(Nile)河の沖積質溪谷に居住したる人民の歴史之有名な
るギリクス國の歴史家ヘロドトス(Herodotus)は紀元前五世紀の頃此國に遊歴した
る者なるが此人曰くエジプトはナイル河の恩賜なり此河は誰人も知悉せる如く
亞弗利加大洲の東北に縱絶し源を赤道直下なるダハットリヤナイアンサ湖に發し
北流してアビシニヤの高原を過ぎエジプトに入り所在を灌漑して實に沙漠の中
央一帯の沃地を化成す此河の上流なるアビシニヤの山中にては年々夏季に到

れば霖雨降ると以て秋末の頃來れば河水大に汎濫し遂に渣碎せる泥土を下流の沿岸に沖積し地味を新に豐沃にし農業は唯播種と收穫の勞のみに止るを以て此地方に太古住民の甚だ繁殖して遂に歴史的の大國民を組成したるは偶然ならず

エジプトは古代の國あれば其歴史を稽查するに史家の最も辛苦したる所なり紀元前二百五十年の頃此國の僧侶マナソ(Manesho)ある者の著述したる歴史探古學士諸輩が檢覈發見したる古文字舊約全書グリース人ヘロドタス羅馬人ダイヲドラス(Diodorus)の紀事等に憑據し此國の歴史を編纂したるものに從へば左の如し

此國の歴史は太古即ち紀元前三千年より全五百二十五年彼斯人の爲めに滅亡されし際に到る二千四百年の記録即ち是れなり此間を三期に分つ

第一期 太古即ち紀元前三千年より全二千八十年ハイクツス族の爲めに滅亡されたる際に到る間を云ふ

第二期 紀元前二千八十年ハイクツス族政權掌握の際より全千五百二十七年エジプト人ハイクツス族を追逐して獨立を恢復せし際に到る間を云ふ

第三期 紀元前千五百二十七年エジプト中興より全五百二十五年波斯人の爲めに滅亡されたる際に到る間を云ふ

第一期間の歴史は特別に記載すべきもの甚少し只紀元前二千四百五十年の頃彼の有名なるピラミッド乃ち大三角塔を建設したると是なり當時國王はメムフヒス(Memphis)に都し中史集權の政略を以て全國を統治したり其後國政漸く衰へ分裂して數多の王國となり中央集權の政略方に衰へたると同時にハイクツス族(Hyksos)東方より進入して終にエジプト王國を滅亡したり

第二期は即ちハイクツス族統治の時期にして紀元前二千八十年より同一千五百廿七年に至る凡五百年間繼續すこのハイクツス族なるものは元亞細亞大陸の西南部に遊牧したる一種族ありて紀元二千八十年終にエジプト國を滅亡したるものなり此間の特記録すべきもの少し唯紀元前一千九百廿年に當り舊約全書中の彼のアブラハム(Abraham)此國に移住したると同千七百六六年に當りシェーコフ(Caoc)及び其子孫の此國に移住したるの二事は宜しく記憶すべき者とす紀元前千五百廿七年に當りエジプト人獨立の兵を擧げハイクツス族を放逐して終に國

權を回復す

第三期は即ちエジプト中興史にして紀元前一千五百廿七年ハイクツス族放逐の際より同五百廿五年此國滅亡の際に至る迄其間凡一千年なりとすハイクツス族を放逐して國權を回復したるハ實にシーブス(Shubus)の一王子の力に因るを以て國民遂に此人を以て新王國の長となす此人即ち王位に即きシーブスニ都一中央集權の政を布き子孫世々エジプト王の位に即くエジプトの歴史中おて極盛ある時期は實に此期間にあるものにして紀元前千五百年より同千二百年に至る三百年間を史家稱してエジプトの金世と稱す此間國人競て宏大なる建築物を興し又國王ラメセス第二(Rameses)の如きは四方を征伐し進んで亞細亞の西南に入り所在の諸國を征服したり既にして國勢漸く衰へ紀元前五百廿五年に至り波斯王カンパイセス(Cambyses)の爲め其國を亡さる次いで亦歴山大王の爲めに征服せられマセドン帝國の一領地となる次いで紀元前三十年彼の美人の聞へ高き女王クレオパトラ(Cleopatra)の代に當り羅馬人の爲めに征服せられ遂に羅馬の一州となる茲に於てか古代史の所謂エジプト國なるもの終ふ消滅也

之を要するにエジプトの政府及び諸制度の建築尤も古き國なり人民を僧侶武士賤民の種族に格別したり僧侶は尤權力あり者にして或は君主の權力に越へたるものあり此輩は宗教上の官職に任せられたるのみならず又醫術文學天文學等を研究し一般人民より甚尊崇されたる者なり武士の權力ハ之ハ亞ぎ且租税を免せられ甚優待されたるものとす賤民は農工及び牧畜者にして甚輕蔑せられ政權併に土地を所持するを得ざりしものなり是等の三族相互に交通せず且結婚せず智識を交換する等のとなく從て人心變通せず僧侶の子孫は永世僧侶たり武士の子孫は永世武士たり賤民の子孫は永世賤民たるを以て自ら各人の志望を沮喪し人材の發達を妨害し遂に此國の開化をして沈澱せしむるに至れり
エジプト人の建築に關し驚くべき宏大なる物を興起したり大三角塔の如きスフィンクスの如きメープスの宮殿の如き今日これを探討する者をして眞に喫驚せしむ然れども審美學上より觀察せば決して美と云ふべからず此國の人民は亦宗教上ハ關し靈魂の不滅なるを信用し且天文學幾何學に關して多少の智識を具有したり然れ共之を一言すれば此國の文明を始終沈澱したるものにして甚進歩的

に非らざりしを知るべし

バビロニヤ アッシリヤ (Babylonia and Assyria)

バビロニヤ及びアッシリヤの兩古國の地勢上相連續し住民も同種族に屬し且つ兩國共に多年一政府の下に在りたるを以て史家尋常兩國を合併して記録するを例とす

兩國の所在はユーフラテス (Euphrates) 及びティグリス (Tigris) 兩河の沖積質平原なり誰人も知了せる如く此兩河はアルメニヤの山中より源を發し南流して波斯灣に注ぐものにして其所在は土壤豐沃地勢平坦灌溉利便運漕捷快を極はめ此地方の椰樹實の實に古往今來人々の艶稱する處にして植物學者の言ひ依れば野生の麥はユーフラテス河口に蔓生すと此地方の地利斯くの如し古代に當り人民所在に蕃殖して邦國を建設したるは奇とするに足らず

此地方には太古メソポタミヤ人と同種族なるスメリヤン (Sumerians) アッカデーヤン (Accadians) の兩人種住居せしは紀元前三千年乃至二千年の間に當りセミチツク民族の一種なるケルデアヤン人 (Chaldeans) 來到してスメリヤン、アッカデーヤンの兩人種を

亡びし漸く在所を押領して遂に一新王國を創建したり是れをバビロニヤ帝國となすバビロニヤ帝國の創建者は經典の所謂ニムロッド (Nimrod) すなはち是れなり

バビロニヤ帝國の都城をバビロン (Babylon) と稱す國人敬神の觀念甚だ深かりしを以て都城內到る處に祠堂の設けありしと云ふ其國人の最も尊拜したる神明はアヌ (Anu) と名づけ之れを國人の父母と崇稱したり又大陰を尊拜してシン (Sin) と名づけ土地を尊拜してベル又はバール (Bel or Baal) と名づけ時々これを祭奠したりと云ふ又イシヌター (Ishtar) と名づくる戦争及び愛を呵護する一神明あり此神明は又生産に關する事を司宰するものなりとて農作物の收穫の豐饒ならんとを祈るなどには皆此神を以てしたり然れども此神は元生産に關する事を司宰するものあればとて其祭典の節には種々猥褻を極めたる儀式を祠前に施行したりと史家云ふセミチツク民族は本性猥褻なるものなればイシヌター神の祭典の節の儀式杯は會ま以て此民族の本性を現はしたるものなりと

数学及び天文學上の智識に到りてはバビロニヤ人は遂かにエジプト人に超へた

るものと云ふべし一ケ年間を十二ケ月に分ち黃道十二宮杯の事を初めて稽考したるは實にバビロニヤ人なり又初めて七日を以て一週と定め一日間を十二時に分ち一時間を六十分に分ちたるものもバビロニヤ人なり又度量の知識と初めて世に傳へたるもバビロニヤ人なり亞細亞の國民は實にバビロニヤの度量に因りて初めて貨物を計算測定するを知了したりと云ふ建築物に到りては甚だ謂ふべきもの少し陶器の製造に到りてはバビロニヤ人の殊に其妙を得たるものなりと云ふ絹布帛の製造に到りても嘆賞すべきものあり又バビロニヤ人の文學上の嗜好をも有したりと云ふ

アッシリヤ

アッシリヤの人民はセモチツク民族に歸す元來ケルデヤの地内に棲居したるものなるが後相率ひてタイグリス河上流の地に遷住したり當時バビロニヤ帝國に從服し居たれども紀元前千二百五十年の頃遂に其の羈絆を脱して獨立す既にしてアッシリヤの勢力漸く増進し遂にバビロニヤに凌駕し大に覇を西部亞細亞の間に稱するに到る

アッシリヤは紀元前千二百五十年の頃獨立し全六百二十五年復たバビロニヤ人の爲めに亡ぼされし際に到るまで其間凡そ六百年これを大別して二期とす

- 一 紀元前千二百五十年アツツリヤ建國より全七百四十五年國帝タイグラス、ヒレーサー (Tiglath-pileser II) 第二の四方を征伐して一新大帝國を創設したる際に到る間
- 二 タイグラス、ヒレーサー第二の代より紀元前六百二十五年國の亡びたる際に到る間

第一期間の顯著なる帝王はタイグラス、ヒレーサー第一并にアツチャー、イダンニ、パル (Asshur-iddani-pal) の二とす前者は紀元前千百三十年の頃四方を征伐してアッシリヤの版圖を擴張し後者は尋常の歴史上にサルダナパラス (Sardanapalus) を記せる者にして其治世の間壯宏なる宮殿を築造し甚だ驕奢を盡くしたるを以て古代史上に顯著す其後紀元前七百四十七年に當りバビロン王ネーボナッサ (Nabonassar) の爲めお一時征服せられしが紀元前七百四十五年に到りタイグラス、ヒレーサー第二兵を擧げてバビロン人に抗し遂にアツツリヤの獨立を回復すタイグラス、ヒレー

サ一乃ち勢に乗じて四方を征伐し覇を西部亞細亞に稱す其後センナチエリツプ (Sennacherib) なる國王紀元前七百五年より全六百八十一年まで統治せしが此王も亦盛んふ四方を征伐し其版圖實にバビロニヤ、メソポタミヤ、ミデヤ、シリヤ、フェニシヤ、パレスタインの大半、アラビヤ、エジプトを包羅せり是れに於て大に國都ニニヴ (Nineveh) 裝飾一世の壯觀を極む史家これをアッシリヤの金世と艶稱す

アッシリヤ四方を征伐し覇を西部亞細亞に稱したるも其實單に其版圖を擴張したる迄ふ止り之を凝固にして一躰と爲すを計らず人心の嚮背區々たりを以其泰平を極盡せし間は敢て何等の動搖もあなかりしも一朝外寇に逢遭して忽ち社稷の顛覆するに到れり紀元前六百四十年メデヤの一主長フレールツ (Phraortes) なる者兵を擧げて本國アッシリヤに抗す未だ幾何もなくフレールツ亂軍中斃る其子サイアザレス (Cyaxares) なる者亡父の志を嗣ぎ愈兵を起してアッシリヤを攻め漸くニニヴに迫る會まフシシヤ人 (Scythians) 亞細亞の北部より長驅し來り南方の諸邦國に侵入し奪掠を恣にすサイアザレス乃ち暫くこれを防禦せんとしアッシリヤの攻撃を中止すバビロンの副王子ポボラツザ一も亦たスシシヤ人と逆撃す

スシシヤ遂に北奔す是に於てカイアサレスはチーポボラツザ一と相同盟シアッシリヤを攻撃し紀元前六百六年カイアザレスはチーポボラツザ一の子チブカドチーザ一 (Nebuchadnezzar) と共にニニヴを陥るアッシリヤ國是に於てか滅亡してバビロニヤ獨立して中興す

これを要するにアッシリヤの歴史は四方侵略の歴史なり世の人文には甚だ影響を及ぼすと少く其文學に到りても遙かにエジプト、バビロニヤの下に出で美術の如きは悉くバビロニヤ人に摸倣したるものに過ぎず概して創造の天才に乏しかりか一は史家の皆稱道する處なり然れども隧道開鑿、水道設置、排水術に到りては何れの國民の未だ得て知るべからざるものを早くも納得したりとも云ひ且つは土工事業に到りては種々の有要なる器具をも發明したりとの事なれば獨り侵略的のみの人民にはあざざりしを知るべし

後バビロニヤ國

バビロニヤの獨立して中興したるものを後バビロニヤ國と稱す其初王は即ち始めてアッシリヤに對し兵を擧げたるチーポボラツザ一なり其子チブカドチーザ一

父の位を嗣ぎ四方を征伐して武名を擧げ且つ國都バビロンを裝飾して前古無比と稱すバビロンは方形の市府にて其廣大なる宛然東京市に十倍すチブカドチーザーの後四王相尋で嗣ぐ其最後なるをチーボナデューヌ(Nabonadius)と云ふ此王の代間紀元前六百二十五年お當り波斯國サイラス大帝(Cyrus)兵を擧げて西進すバビロンを陥れバビロニヤ國を亡ぼす後バビロニヤ國殲設以來緩かに八十七年にして國遂に亡ぶ

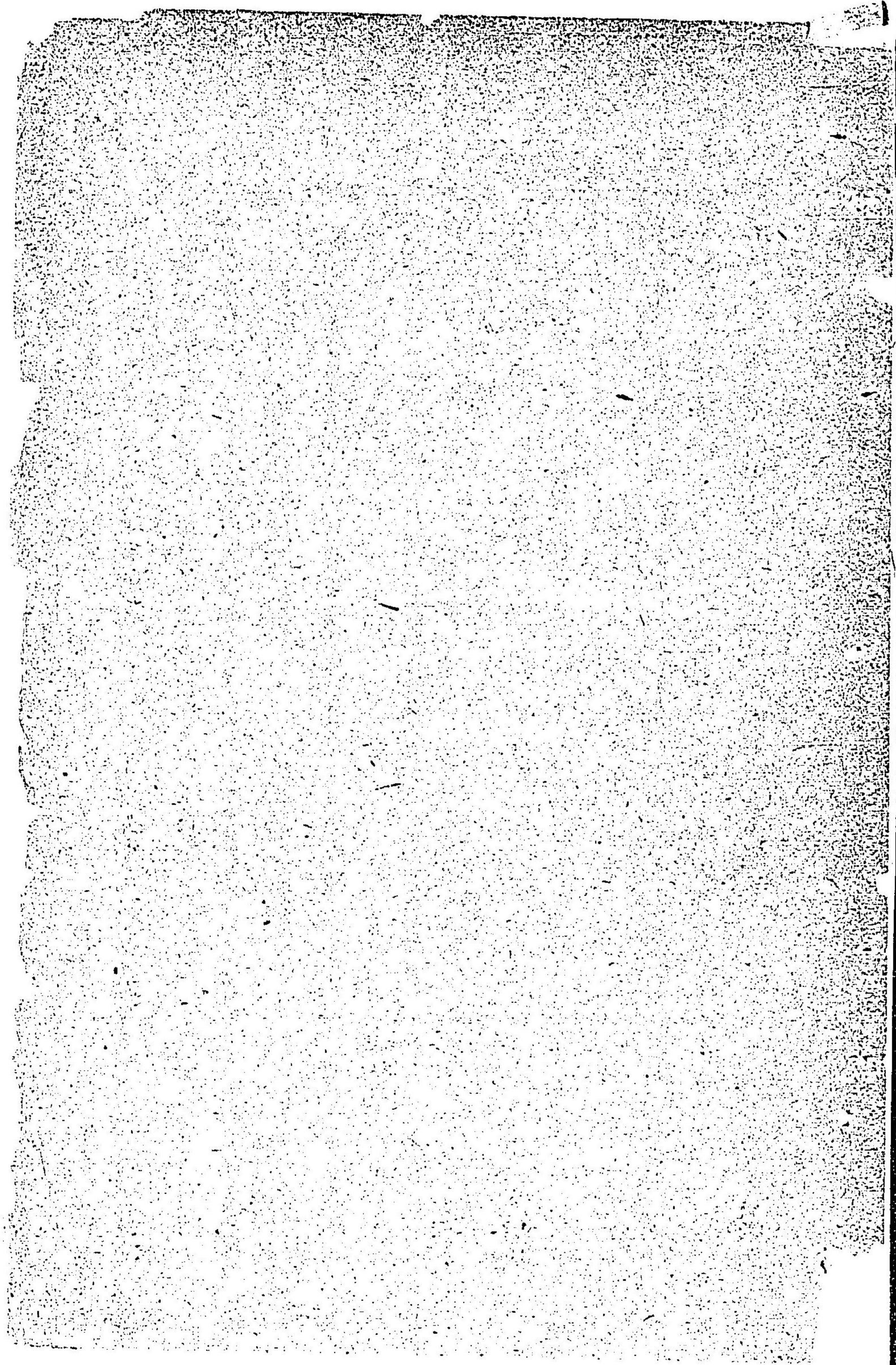
フェニシヤ(Phoenicia)

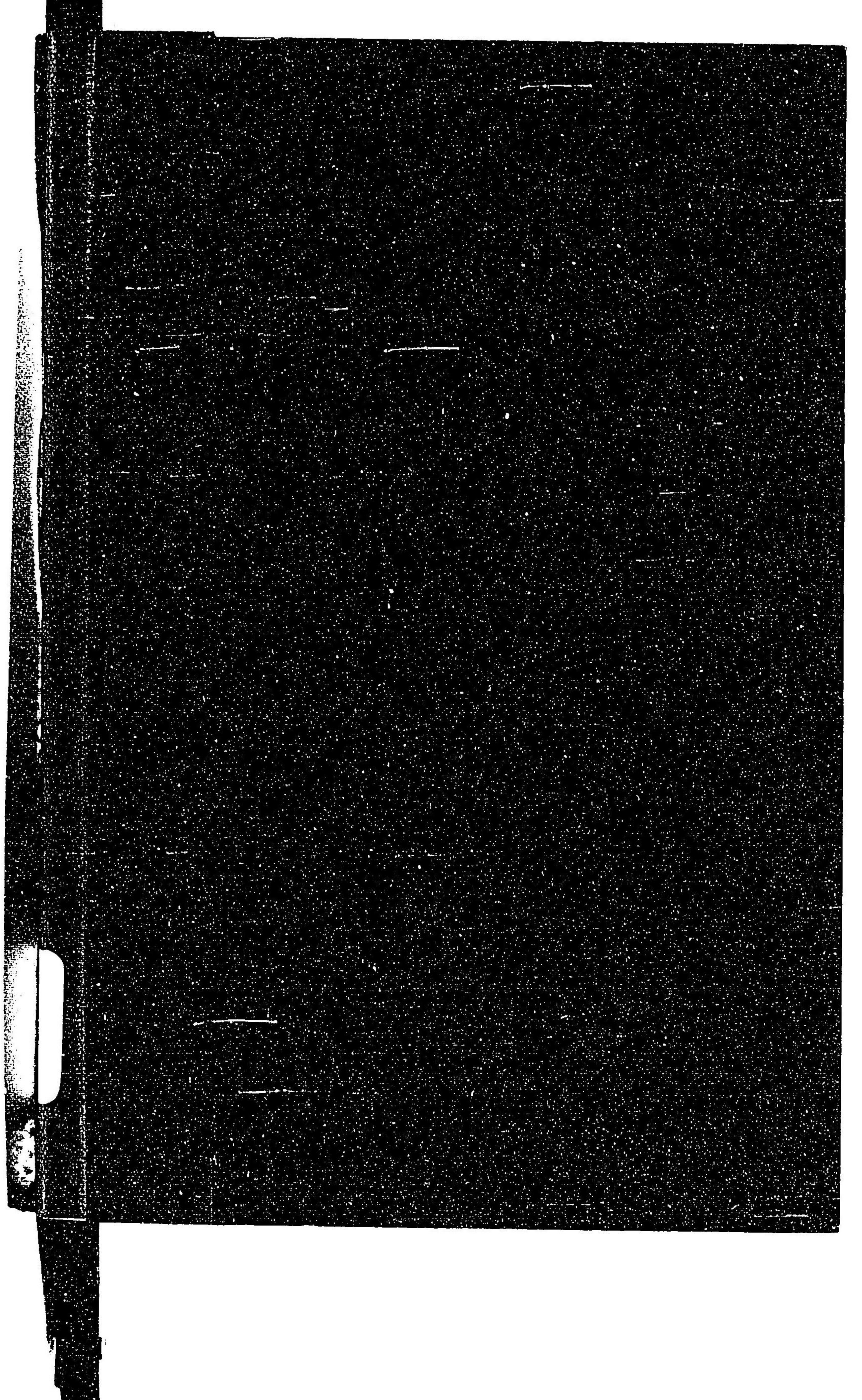
シリヤ、パレスティン連山の西地中海に沿ひ一帶の濱岸あり其長さ僅かに百五十哩幅五哩乃至十四哩に過ぎずと雖も是れ實に古代史中に通商貿易を以て艶稱されたるフェニシヤ人の棲所となす

フェニシヤ人はセモチック民族に屬し元來玻璃紫色ある染料等の製造を以て稱せられ且つ文字書法を甚だ改良したるを以て顯著せりと雖も其封土の位置最も通商貿易に順適せるを以て遂に古代史中の大通商家大貿易家と化成したり其人民の遷往なる地中海の沿岸島嶼の間は更なり遠くシブラルタルの海峽を經航し

欠

MISSING





14

214

事故本

乱丁多し

欠ページ

史学(近世)P63-70

'89. 1. 12

003585-000-7

14-214

史学

福富 孝季 / 述

ACD-0157

